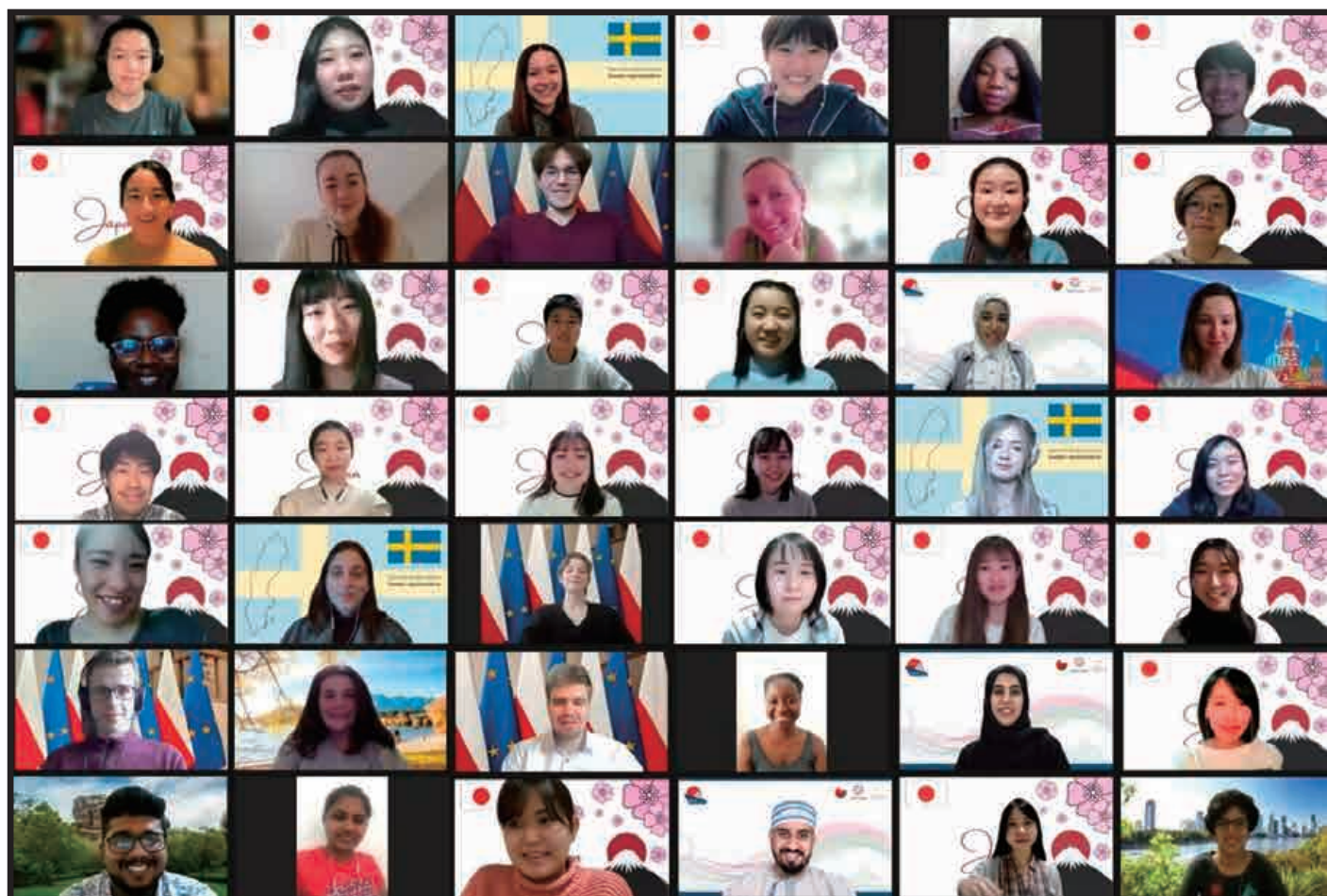


内閣府青年国際交流事業報告書 2021

令和3年度 「世界青年の船」(オンライン)



内閣府

内閣府青年国際交流事業報告書 2021

令和3年度 「世界青年の船」(オンライン)



内閣府

序

内閣府では、日本と諸外国の青年の交流により、青年相互の友好と理解を促進するとともに、青年の国際的視野を広げ、次代を担うにふさわしい国際性を備えた健全な青年を育成することを目的として各種の青年国際交流事業を実施してまいりました。

その中でも、「世界青年の船」事業は、明治100年記念事業の一つとして昭和42年度（1967年度）に開始された「青年の船」事業に由来するもので、日本を含む11か国から多様なバックグラウンドを持つ参加青年たちを、ディスカッションや文化交流、ワークショップ等を通じて、国際的視野を広げ、国際化が進展する社会の各分野でリーダーシップを発揮することができるよう育成することを目的としています。

本事業は元々、船上で共同生活を送りながらディスカッションやセミナー等の研修を行うものですが、コロナ禍を巡る状況がいまだに予断を許さないことから、昨年度に引き続き、オンライン形式で事業を開催することといたしました。今年度は、昨年度好評であった、世界各地で活躍する本事業の参加経験者によるオンライン講演会のノウハウを活かしつつ、新たに青年同士の交流に重点を置いた内容としています。

具体的には、日本参加青年による事前研修のほか、社会の指導的地位で活躍する有識者によるSDGsの各分野に関する講演や、SDGsを共通テーマにしたコース・ディスカッション、参加者同士による自国の伝統文化や食文化などの文化紹介を行うワークショップ、本事業で学んだ成果の発表など「世界青年の船」を疑似体験できる多彩なプログラムを計8回にわたってオンラインで開催し、日本を含めた世界中の青年に参加いただきました。

交流プログラムを終えた後に実施した事業報告会では、参加青年による自主企画が開催されたほか、事業で得られた成果や自らの体験等について熱く語られるなど、本プログラムを通じた参加青年の大きな学びや成長を感じ取ることができました。また、事業報告会は広く一般に公開されており、視聴した青少年から「次は自分たちが参加する番だ」などの声も聞かれるなど、今後の事業へのつながりも期待できるものとなりました。

今回参加した青年一人ひとりが、地域、国家、世界のいずれの舞台においても、今後の活動においてリーダーシップをいかに発揮されることを願っております。

内閣府としても、これまでの交流事業の経験や実績を踏まえて、今後の「世界青年の船」事業の更なる充実につなげていきたいと思っております。

本報告書は、今回のオンライン交流で行った様々な活動について記録したものです。この報告書を通じ、事業の成果を御理解いただくとともに、国際交流への関心を高め、今後の一層の御支援をいただければ幸いです。

最後に、本事業の実施に当たって御協力いただいた参加各国の政府及び事後活動組織、外務省本省並びに在外公館の関係各位に、心から御礼申し上げます。

令和4年3月
内閣府青年国際交流担当室長
黒瀬 敏文

内閣府青年国際交流事業報告書2021
令和3年度「世界青年の船」事業(オンライン)

CONTENTS

序

カラーグラビア

第1章 事業の概要	9
1. 趣旨	9
2. 事業内容	9
3. 日程	9
4. 参加国	10
5. 参加青年(PY)	10
6. ファシリテーター会議	11
7. 日本参加青年事前研修	12
8. 日本参加青年の成果報告	12
第2章 「世界青年の船」事業(オンライン)	13
1. 日程	13
2. 内閣府特命担当大臣挨拶	14
第3章 コース・ディスカッション	15
1. 社会問題	15
2. ジェンダー平等問題	18
3. 経済問題	21
4. 環境問題	24
第4章 ワークショップ	28
1. ワークショップ一覧	28
第5章 本事業に対する事業評価	34
1. 参加青年による事業評価	34
2. 統率相談員所感	40
関係資料	42
1. 参加者名簿	42
2. 参加青年の構成	46
3. 事後活動	47
4. 既参加青年による事後活動組織設立への動きとその歴史	47
5. SWYAA国際連盟について	49

* 個人情報保護のため、参加青年個人を識別できる氏名等の情報については掲載しておりません。

「世界青年の船」(オンライン)

開会式 令和4年1月15日

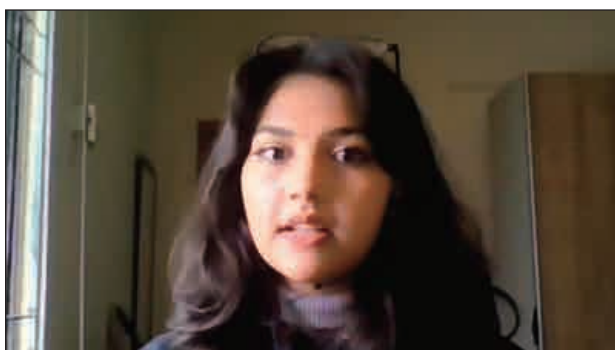


若宮健嗣内閣府特命担当大臣挨拶



開会式に集った9か国からの参加青年たち

基調講演 令和4年1月15日



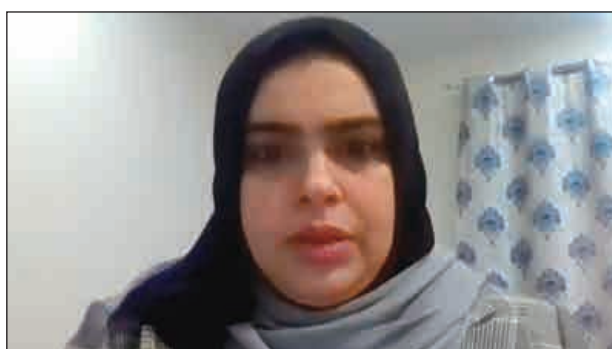
社会問題コースの基調講演者
Ms. Humna Rehan
ラホール・グラマー高校（イスラマバード）生徒会副会長
パキスタン・リザーブ・ディベート・チーム2021



ジェンダー平等問題コースの基調講演者
Mr. Nery Ronatay
国連女性機関、女性・平和・安全保障部門プログラム・
アナリスト、国連平和大学客員教授



経済問題コースの基調講演者
Dr. Karen D. Saccalan, Rpps
心理学者、リー・ヘクト・ハリソン（フィリピン）、
デ・ラ・サール大学助教



環境問題コースの基調講演者
Dr. Maysoon Nedham Awadh
バーレーン大学理学部生物学科助教

ワークショップ 令和4年1月22日、29日



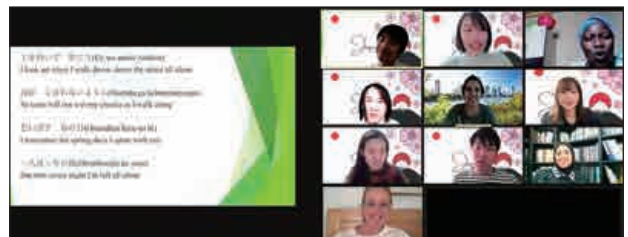
オーストラリア：Tucker
オーストラリアの食に舌鼓を打つ！



日本：日本語で名前を書こう！



日本：武道に挑戦しよう！



日本：オンラインコースで世界を元気に！
～SWYからのメッセージ～



日本：Why Japan?
日本のビジネス文化を理解するための道



ニュージーランド：ニュージーランド体験
アオテアロア・ニュージーランド



オマーン：アラビア文化



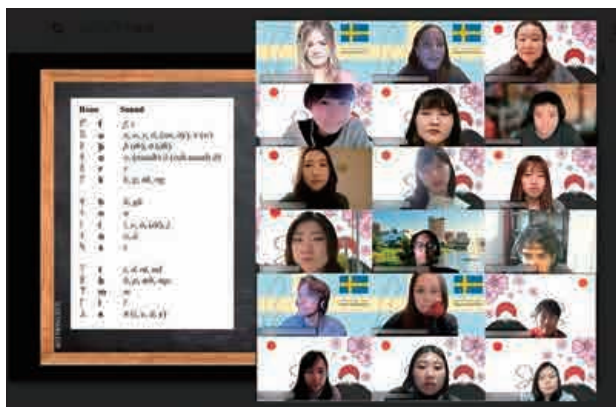
ポーランド：ポーランド国内のボランティア団体について



ロシア：現代と伝統のツールを用いたロシア文化の特集



スリランカ：アジアの奇跡の島・スリランカ



スウェーデン：文字やゲームを通して
スウェーデンとスカンジナビア古語を学ぼう！

コース・ディスカッション 令和4年1月15日、22日、29日



社会問題コース



ジェンダー平等問題コース

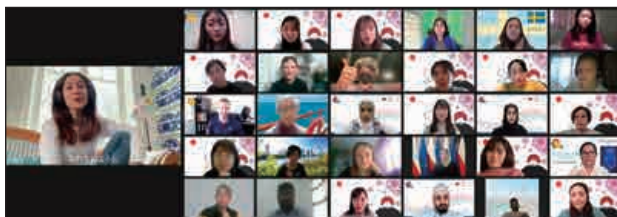


経済問題コース



環境問題コース

ワークショップの成果発表 令和4年2月12日

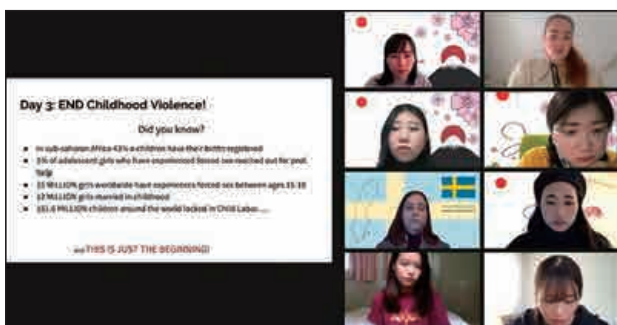


日本による
「オンラインコースで世界を元気に! ~SWYからのメッセージ~」
の発表の様子



オーストラリアによる
「Tuckerオーストラリアの食に舌鼓を打つ!」の発表の様子

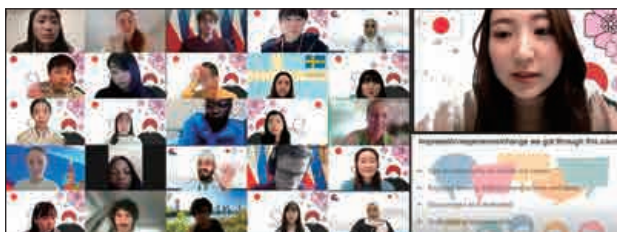
コース・ディスカッションの成果発表 令和4年2月12日



社会問題コース



ジェンダー平等問題コース



経済問題コース



環境問題コース

修了式 令和4年2月12日



統率相談員である中沢聖史氏がプログラムの講評を行った



交流過程を無事に修了した参加者たち

第1章 事業の概要

1. 趣旨

グローバル化が進展する国際社会・地域社会を牽引する次世代リーダーが求められている。「世界青年の船」事業（SWY）は、こうした観点から、世界各地から多様なバックグラウンドを持つ青年が集い、ディスカッションやワークショップ、文化交流を通じて異文化対応力、コミュニケーション力、リーダーシップ、マネジメント力の向上を図ることで、これらの能力を発揮して国際化の進展する社会に多大な貢献ができる青年を育成し、併せてグローバルな人的ネットワークを構築することを目的に実施している。

しかしながら、令和2年に感染拡大した新型コロナウイルス感染症は、いまだ全世界的に収束する見通しが不透明であり、対面方式の実施について、青年及び事業関係者の安全を十分に確保することが困難と言わざるを得ない状況であることから、これまで行ってきた「世界青年の船」事業の特色をいかながら目的を最大限達成するよう、今年度はオンライン方式により、ディスカッションやワークショップを実施する。

2. 事業内容

本事業では、日本と世界8か国の青年が4日間のオンライン交流を以下のプログラムで行った。

（1）テーマ別講義

世界的な共通課題である持続可能な開発目標（SDGs）をコース・ディスカッション（CD）の共通テーマとして4つのテーマ（社会問題（貧困、飢餓、教育等）、ジェンダー平等問題、経済問題（雇用、経済格差等）、環境問題（気候変動、海洋問題、生物多様性等））に分かれ、当該分野に造詣の深い有識者の講義を受講し、知見を深める。

（2）ディスカッション

左記（1）の4つのテーマに分かれて、ファシリテーターの指導下、ディスカッションを行う。

（3）ワークショップ（文化紹介）

ワークショップスタイルの異文化体験を通し、参加青年は異文化に対する理解を深め、国際的な視野を身につける。

（4）成果発表

プログラムで得られたディスカッションとワークショップ成果について、それぞれ発表を行う。

3. 日程

事項	日程
日本参加青年選考 オンライン面接試験	令和3年8月22日（日）、27日（金）、28日（土）、29日（日）
ファシリテーター会議	令和3年11月4日（木）、11月8日（月） 令和4年1月15日（土）、22日（土）、29日（土）、2月12日（土）
日本参加青年事前研修	令和3年12月4日（土）、12月11日（土）
「世界青年の船」事業 （オンライン）（SWY Online）	令和4年1月15日（土）、22日（土）、29日（土）、2月12日（土）
日本参加青年の成果報告	準備日：令和4年2月19日（土）、実施日：26日（土）

4. 参加国

参加国は次の9か国で、これらの国から合計76名（外国参加青年37名、日本参加青年39名）の青年が参加した。

オーストラリア連邦

オマーン国

ロシア連邦

スリランカ民主社会主義共和国

日本

ニュージーランド

ポーランド共和国

南アフリカ共和国

スウェーデン王国

※以降国名は全て略称表記とする。

5. 参加青年（PY）

（1）人数（定員）

外国参加青年：1か国5名（8か国）

日本参加青年：40名

9か国合計80名

（2）日本参加青年の選考

内閣府は、次の応募資格を満たしている応募者に対して、書類選考を行った後、オンラインにて面接を行った。

- 日本の国籍を有し、令和3年4月1日現在、おおむね18歳以上30歳以下であること。
- 心身が健康で協調性に富み、事業の計画に従って規律ある行動ができること。
- 日本の社会、文化等について相当程度の知識を有すること。
- 交流対象国に対して関心と理解があること。
- 本事業における活動（ディスカッション等）を円滑に行うことができる英語力を有すること。
- 事前研修、オンライン交流、成果報告の全日程に参加できること。
- 本事業終了後もその経験をいかして社会活動を活発に行うことが期待できること。
- 自らの負担でオンライン交流に必要な機材（パソコンのほか、インターネットに接続できる環境等）を準備できること。

※本事業に参加したことによって、来年度以降の「世界青年の船」事業を含めた内閣府の行う青年国際交流事業への参加の妨げになることはない（本事業参加者も、来年度以降の内閣府の行う青年国際交流事業に参加可能）。

※令和2年度の内閣府の実施したオンライン交流事業を含め、過去の内閣府の青年国際交流事業に参加した方も応募は可能である。

（3）外国参加青年の選考

外国参加青年の募集は、外務省及び参加国を管轄する日本国在外公館を通じて参加国政府等に推薦を依頼した。資格要件は、次のとおりであった。

- 令和3年4月1日現在、おおむね18歳以上30歳以下であること。
- 当該交流対象国に在住していること。
- 心身が健康で協調性に富み、事業の計画に従って規律ある行動ができること。
- 日本に対して関心があり、今後、自国と日本との交流拡大と友好促進を担うことが期待できること。
- 自国の社会、文化等について相当程度の知識があること。
- 自国以外の交流対象国に対して関心と理解があること。
- 本事業において、大学レベルの議論等諸活動を円滑に行うことができる英語力を有すること。
- 日本参加青年とのオンライン交流の全日程に参加できること。
- 自らの負担でオンライン交流に必要な機材（パソコンのほか、インターネットに接続できる環境等）を準備できること。

6. ファシリテーター会議

「世界青年の船」事業（オンライン）におけるディスカッションの目的などについて、ファシリテーターに共通認識を持ってもらうとともに、その運営方法等について協議、情報交換等を行うことにより、ディスカッションの円滑かつ効果的な実施に資するため、ファシリテーター4名及び統率相談員とオンラインにて、ファシリテーター会議を開催した。

【ファシリテーター会議協議事項】

第1回（令和3年11月4日）

- (1) 「世界青年の船」事業（オンライン）概要と日程
- (2) ファシリテーターから課題、ディスカッション・プラン、基調講演者候補について説明及び意見交換
- (3) コース・ディスカッション成果発表の発表形式
- (4) PYの事前課題

第2回（令和3年11月8日）

- (1) ファシリテーターからコース概要の変更点の説明及び意見交換
- (2) 慎重に扱うべき話題への対応
- (3) 日本参加青年事前研修プログラム内容の説明

【ファシリテーター】

ディスカッション・グループ	氏名	性別	国名
社会問題	Ahmareen Farah	女	カナダ
ジェンダー平等問題	Eugene Cubilla Sosing	男	フィリピン
経済問題	Aida May Bergado-De Guzman	女	フィリピン
環境問題	May Ali Khalfan	女	バーレーン

【統率相談員】

氏名	性別	国名
中沢聖史	男	日本

第3回（令和4年1月15日）

- (1) コース・ディスカッションIの振り返り

第4回（令和4年1月22日）

- (1) コース・ディスカッションIIの振り返り

第5回（令和4年1月29日）

- (1) コース・ディスカッションIIIの振り返り
- (2) コース・ディスカッション成果発表に向けた準備

第6回（令和4年2月12日）

- (1) コース・ディスカッション成果発表の感想、振り返り



*統率相談員：日本参加青年に対し、事前研修、オンライン交流、成果報告が一連の事業として青年の育成に資するように青年のまとめ役・相談役となる。

7. 日本参加青年事前研修

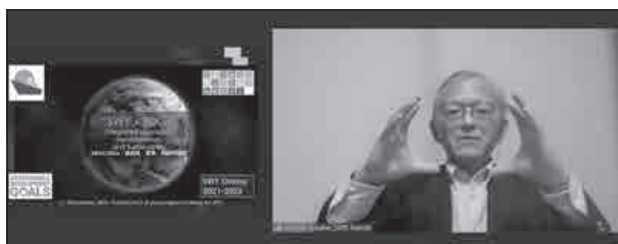
日本参加青年事前研修が、令和3年12月4日と12月11日にオンラインにて実施された。本事業の趣旨、内容等について理解を深めるために必要な基礎知識及び参加青年としての心構えやディスカッションの基本情報の習得などについて、統率相談員やファシリテーターからの指導を得ながら、外国参加青年とのオンライン交流に備えた諸準備を実施した。約40名の日本参加青年は統率相談員のリードの下、お互いを知る場として、自己紹介やプログラムから得たいことなどを共有した。また、各ディスカッション・

コースに分かれ、ファシリテーターと共にセッションの時間を持った。基調講演者として「世界青年の船」事業に4度アドバイザーで乗船した経験を持つ、バルセロナ自治大学・環境科学技術研究所出身の佐藤太氏を迎え、「SWYとSDGs：統合性・変革・持続可能性」というタイトルでSDGsに関する講演を行った。このセッションを通じて日本参加青年はSDGsのテーマと現状について知識を深めた。また、日本青年国際交流機構（IYEO）が組織の説明と活動事例を紹介した。

8. 日本参加青年の成果報告

日本参加青年の成果報告が、令和4年2月26日にオンラインにて実施された。その準備日を2月19日に設け、日本参加青年は、統率相談員と共に、本事業で得た知識や経験などを広く共有、発表することを目的に成果報告へ向けた準備を行った。その後、本番に向けて報告会実行委員会を中心に、原稿準備やリハーサルが行われた。成果報告では、本事業を振り返り、今後の活動についての展望を明確

化するとともに、事業を通じて得た経験や学んだことを集約しまとめ、成果として報告した。テーマ「世界青年の船 オンライン国際交流のリアル～時差と海と言語を越えて～」に沿い、ディスカッション体験やパネルディスカッション、参加者（視聴者）との意見交換が行われた。また、次年度事業説明や事後活動について紹介を行った。成果報告には、71人の参加者が集った。



佐藤太氏による基調講演



事前研修の様子



成果報告終了時の様子

第2章 「世界青年の船」事業（オンライン）

1. 日程

月日	時間 (日本時間)	活動内容
2022年 1月15日 (土)	14:00-14:55 15:00-15:30 15:30-16:30 16:40-18:00	各国紹介動画上映 開会式 ・若宮健嗣内閣府特命担当大臣挨拶 ・内閣府担当者、一般財団法人青少年国際交流推進センター担当者紹介 ・ファシリテーター並びに統率相談員紹介 ・参加国紹介 ・「世界青年の船」事業（オンライン）説明 ・ワークショップ・セッションの紹介 コース・ディスカッション別の基調講演 コース・ディスカッションI 社会問題コース・ジェンダー平等問題コース 経済問題コース・環境問題コース
2022年 1月22日 (土)	14:00-14:45 15:00-16:00 16:10-18:00	各国紹介動画上映 ワークショップI 開催国：日本・オーストラリア・オマーン・ポーランド コース・ディスカッションII 社会問題コース・ジェンダー平等問題コース 経済問題コース・環境問題コース
2022年 1月29日 (土)	14:00-14:45 15:00-16:00 16:10-18:00	各国紹介動画上映 ワークショップII 開催国：日本・ロシア・スリランカ・スウェーデン・ニュージーランド コース・ディスカッションIII 社会問題コース・ジェンダー平等問題コース 経済問題コース・環境問題コース
2022年 2月12日 (土)	15:00-18:00	ワークショップの成果発表 ・11のワークショップ別に発表 コース・ディスカッションの成果発表 ・4つのコース別に発表 修了式 ・ファシリテーターからの感想 ・統率相談員から講評 ・内閣府青年国際交流担当挨拶

2. 内閣府特命担当大臣挨拶

若宮健嗣内閣府特命担当大臣

令和3年度のオンラインによる世界青年の船事業の開会に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

世界青年の船事業は、次代を担う青年育成を目的に実施し、日本と世界の青年が相互の理解と友好を育み、国際協調の精神を養うことで、これまで世界で活躍する多くの青年を輩出してきました。

本日、このような場に、熱意ある青年の皆様が参加され、開会を迎えることができ、私としても喜ばしい限りです。

さて、本事業は元々、船上で共同生活を送りながら、ディスカッションやセミナー等の研修を行うものですが、今年度はコロナ禍を巡る状況が、いまだに予断を許さないことから、昨年度に引き続き、オンラインで開催することといたしました。

昨年度は、世界各地で活躍する本事業のOB・OGによる講演会をオンラインで開催し、2,000人を超える大変多くの方にご参加いただいたと聞いております。

今年度は、これまでの船での交流がオンラインでもできるだけ体験できるように、青年同士の交流に重点を置き、ディスカッションや自国の文化紹介などを新たに設け、更に充実したプログラムを準備いたしました。

事業を通じて、若者の視点で、SDGsという世界が抱える様々な課題について大いに議論いただくことで、今後の皆様の更なる成長、ひいては国際社会への貢献につながることを祈念し、私のご挨拶とさせていただきます。

令和4年1月15日
開会式

第3章 コース・ディスカッション

コース・ディスカッションは持続可能な開発目標「SDGs」を共通テーマとし、多様なバックグラウンドを持つファシリテーターたちにより、4つのコースが実施された。参加青年は各ファシリテーター主導の下、各コースに関するディスカッションを行い、テーマに添った世界的課題について理解を深めるとともに、他の参加青年の意見を通して参加各国の現状や取組について学んだ。また、各分野に精通する有識者の講義を受けた。3回のセッションを通して、参加青年が自ら行う社会課題解決のための取組を見付け、その実現に向けた具体的な計画を組み立てることをねらいとした。令和4年2月12日に実施された成果発表では、PYが自主的に発表方法を整え、ディスカッションでの学びを成果として全体に発表した。



社会問題コースのファシリテーター
Ms. Ahmareen Farah



ジェンダー平等問題コースのファシリテーター
Mr. Eugene Cubilla Sosing



経済問題コースのファシリテーター
Ms. Aida May Bergado-De Guzman



環境問題コースのファシリテーター
Dr. May Ali Khalfan

1. 社会問題

ファシリテーター：Ms. Ahmareen Farah（オール・ポイント・リロケーション社、カウンセリング部門コンサルタント）
PY：21名

（1）ディスカッション分野

社会問題

（2）ディスカッションの目標とねらい

- a. すべての子どもの権利を尊重することを学ぶ
- b. 子どもたちを犯罪、ネグレクト、搾取から守る
- c. 社会、法律、政策立案者が児童保護を実践するために役立つルールを起草する

（3）事前課題

個人課題

参加青年には以下の事前課題が与えられた。

- a. セッションに期待することをまとめておくこと。
- b. 児童保護に関する国連条約の文書を読んでおくこと。
- c. 国連条約の利点についての質問に回答し、セッションの開始前に提出すること。

(4) 活動内容

有識者による基調講演

氏名・所属：Ms. Humna Rehan・学生、ラホール・グラマー高校（イスラマバード）生徒会副会長、パキスタン・リザーブ・ディベート・チーム2021

要旨

講演は、まず法律的・社会的に使用されている「子ども」の定義を確立するところから始まり、社会的に若く、脆弱で弱い立場にある人たちに対して作られた力関係について探求した。また、子どもたちの政治に対する発言権のあり方についての「youthocracy」という概念を紹介した。これは、子どもの状況を改善する制度を通して、社会変革につながるものである。また、栄養失調や児童労働など、世界の子どもたちが影響を受けている課題についても触れた。さらに若者の視点を法律の制定に反映させるため、議会に若者の枠を確保すべきであるという急進的なアイデアについても語られた。

基調講演から学んだこと

- a. 若者を意思決定の場に参加させるべきであるということ。
- b. 変化をもたらすためには、社会の弱者層が主体的に行動する必要があるということ。

コース・ディスカッション I

ねらい

- a. 子どもの権利とは何かを理解する。
- b. 児童保護の重要性を理解する。
- c. 子どもの身体的・精神的なウェルビーイングと児童保護を関連付ける。

活動

- a. チャット欄に参加者がそれぞれ自分に関する何か面白いことを書き込むという、従来とは違ったスタイルでの自己紹介を実施した。
- b. 事前課題に基づき、このセッションに期待することについてのディスカッションを行った。
- c. 「子どもの権利とは何か」という問いに対し、参加者がそれぞれ子どもの権利について思い付く言葉を一つずつチャット欄に書き込んだ。最後にその結果を表示し、ディスカッションを行った。
- d. 「身体的なしつけは重要だと思うか」というトピックでディスカッションを実施した。異なる文化的背景を持つ参加者たちが集まっていることから、しつけに対する許容範囲はそれぞれ異なっていることが予想された。ブレイクアウトルームに分

かれて話し合い、代表者がそれぞれのグループでまとめた意見を発表した。

- e. 罰を与えることが、子どもにどのような影響を与えるかについてのビデオを視聴した。その後ディスカッションを実施し、それぞれの経験を共有した。

成果

- a. 18歳未満の全ての人たちを子どもと定義することで意見が一致した。
- b. 体罰に関するビデオから、身体的、精神的に厳しい罰を与えることが、子どもの人格を傷つけ、結果として、子どもは大人に対して不信感を抱くようになり、子どもの自信を損なうことにも繋がるということが分かった。

コース・ディスカッション II

ねらい

- a. 国連やその他の国際機関が子どもの権利のために果たす役割を理解する。
- b. 国連の児童の権利に関する条約を理解する。

活動

- a. 始めに全体で前回の振り返りを行った。
- b. 児童保護に関するグローバルな目標についてのパワーポイント・プレゼンテーションを共有した。
- c. 参加者が事前課題として予習してきた、国連の児童の権利に関する条約の中から子どもの権利について取り上げ、どのようにして各目標を達成するかについてのブレインストーミングを実施した。また、フィードバックを元に、ブレイクアウトルームに分かれたセッションをさらに追加した。ブレイクアウトルームでは、子どもの権利を阻んでいるハードルに対する解決策についてのディスカッションを行い、その後全体でディスカッションの内容を共有した。
- d. 国連条約の役割に関するビデオを視聴した。
- e. 「自分の国でこの条約がきちんと守られているか、また、守られていないとしたらその理由は何か」という問いに対し、参加者は再びブレイクアウトルームに分かれて有意義なディスカッションを行った。ディスカッションの結果は各グループの代表者から全体に共有された。

成果

- a. 子どもを守るために国際機関が担う役割について、そして、全ての国が守るべきグローバルな目標について学んだ。
- b. それぞれの国でこれらの法律がどのように施行さ

れているか、また施行されていない場合はその理由は何かについて意見を交換した。

コース・ディスカッションⅢ

ねらい

- a. 社会で起こっている子どもに対する犯罪についての認識を高める。
- b. いじめの概念を明確にする。
- c. 犯罪やいじめに対処する方法や、社会、メディア、法律が担うべき役割を明らかにする。

活動

- a. 前回の振り返りを行った。
- b. ブレイクアウトルームに分かれ、自分たちの社会における子どもに対する犯罪にはどのようなものが挙げられるかを話し合い、その結果を全体で議論した。
- c. インターネット犯罪に関するビデオを視聴し、内容の振り返りを行った。
- d. パワーポイントプレゼンテーションを用いて、子どもに対する犯罪の種類について共有した。
- e. いじめに関するビデオを視聴した。その後、実際にいじめを受けたことがあるかどうかについて、参加者がそれぞれの経験を共有した。また4つのグループに分かれ、学校、社会、メディア、法律ができることについて話し合い、各グループの代表者が結果を共有した。

成果

- a. 児童労働、児童婚、児童売買など、子どもに対して行われる犯罪について学んだ。
- b. なぜいじめが起こってしまうのか、そしていじめは被害者にとって生涯のトラウマとなってしまうということを学んだ。
- c. 子どもたちの状況を改善するために、法律、メディア、社会が果たすべき役割について思案した。

(5) ディスカッションの成果発表

プログラムの最後には、各ディスカッション・グループがそれぞれのコースについてのプレゼンテーションを実施した。社会問題コースの参加青年から、まず18歳未満の全ての人を子どもと定義付けることが述べられた。スライド発表では、3つのセッションから得た成果を以下のとおり全体に向けて発表した。

- a. 体罰を与えることは、子どもの幼少期を台無しにし、人格を傷つけることから、いかなる状況で

も避けるべきであるという結論に至った。体罰によって子どもは大人に対して不信感を抱くようになり、子どもの自信を損なうことにも繋がる。

- b. 児童労働、児童婚、人身売買など、子どもに対する犯罪については、黙って傍観するのではなく、積極的に阻止していかなければならないということを学んだ。
- c. なぜいじめが起こってしまうのか、そしていじめは被害者にとって生涯のトラウマとなってしまうということを学んだ。また、子どもたちの状況を改善するために、法律、メディア、社会が果たすべき役割についても思案した。
- d. 子どもを守るために国際機関が担う役割について、また全ての国が守るべきグローバルな目標について学んだ。
- e. それぞれの国でこれらの法律がどのように施行されているか、また施行されていない場合はその理由は何かについて意見を交換した。

(6) PYの声

- ・ディスカッション・セッションを通じて、二つの驚きがあった。1日目に体罰について話し合っていた時のことである。私個人の意見では、子どもが言うことを聞かずに危険が及ぶような状況であれば、最終的な手段として子どもに手をあげることは、ある程度許容される場合もあるのではないかと感じていた。しかしスウェーデンでは、いかなる状況であっても体罰は許されていないということを知り、国によって考え方は大きく異なるのだということを実感した。短い時間だったが、ファシリテーターや他の参加青年から多くを学ぶことができ、とても素晴らしい時間を過ごすことができた。また、教育についての知識を深めることができた。この3日間を決して忘れない。本当にありがとうございました。(日本)
- ・ディスカッションはとても洞察に富んでおり、多くの新しい視点を知ることができた。パンデミックにより直接会うことはできなかったが、多様なテーマについて、まるで同じ場所に集まったかのように議論することができた。また、自分のリーダーシップの在り方について考える良い機会でもあった。最後に、素晴らしい場を作ってくれたファシリテーターに感謝を伝えたい。(日本)
- ・社会問題のセッションは、時事問題、特に子どもの権利について考える上で非常に有意義なもので

あった。国連の児童の権利に関する条約について多くを学び、小グループでさまざまな問題について議論することができた。他国の人たちとこれらの問題の解決策について話し合った時間はとても充実したものであり、世界で起こっていること、特に子どもについて考えることがいかに重要であるかを知ることができた。ファシリテーターは、様々な質問で私たちを啓発し、私たちにとって素晴らしい経験になるようセッションを導いてくれた。(ポーランド)

- 他のディスカッション・グループの参加者と話したところ、我々のグループは個人の交流の機会が最も多かったということが分かり、それがとても素晴らしいことであったと感じた。ファシリテーターが意見を取り入れながら、ディスカッションの内容を調整してくれたことが非常にありがたかった。(オーストラリア)
- ディスカッションの経験を通して、オマーンでは個人、社会、民間、政府機関などが、あらゆる手段を駆使しながら、この問題に真剣に取り組んでいるということがよく分かった。オマーンが、子どもたちの権利を尊重し、親が子どもたちのために安全な環境を保つ国としてのモデルとなっていることを誇りに思う。世界は完璧な虹になることはない。決まったフレームワークに誰もが納得して従うような世界を作ることはできないのである。一方、個人としては、将来子どもたちを安全な環境で育

てるにはどうしたらよいかを常に考えなければならぬとも感じている。私たちは、自分たちで変えられることから小さな一歩を踏み出し、取り組んでいかなければならない。私たち一人一人が小さな目標を積み重ねていくことで、SDGsを達成することができると思っています。(オマーン)

(7) ファシリテーター所感

児童保護とは、暴力、搾取、虐待、ネグレクトから子どもたちを守ることである。国連の児童の権利に関する条約第19条では、家庭内外での子どもの保護について定められている。こうした子どもを保護する制度に加え、国連のSDGsの4番目にある「質の高い教育」を提供することも、子どもを守るための手段の一つである。その重要性を鑑み、私は青年たちにこのテーマについて学んでもらうことにした。

総じて、とてもいい勉強になった。初めはZoomの機能を全て熟知していないことに対して不安を感じていたが、日々新しい機能を学ぶことができた。事務局の助けもあって3日目にはずいぶん慣れ、全て順調に進んだ。セッションに与えられた3日間という時間はあっという間で、ようやく距離が縮まり始めたころにはもう終了してしまったように感じた。これまで、教師、トレーナー、メンターとして若い人たちと働いてきた経験があるが、今回のファシリテーターという新しい役目により、若い世代とのコミュニケーションスキルをさらに高めることができた。

2. ジェンダー平等問題

ファシリテーター：Mr. Eugene Cubilla Sosing(クイーンズランド大学国際開発プログラム学部プログラム担当スタッフ)
PY：18名

(1) ディスカッション分野

ジェンダー平等問題 - 平等とエンパワメント

(2) ディスカッションの目標とねらい

目標

ジェンダー平等問題への対処に当たって参加青年の間で理解を深め、スキルを涵養する。平等やエンパワメント、国際化した社会におけるジェンダー平等問題の持つ課題や機会に関係した事柄を扱い、現実的な行動計画を提案する上で参加青年が積極的な役割を担えるように導く。

ねらい

- ジェンダー・ロールがどのように形作られ、開発の各種取組に対してどのように影響するか、国際連合の掲げる持続可能な開発目標(SDGs)との関わり及び世界的なパンデミックの時代において、地場そして国際的な観点から認識する機会を参加青年に与える。
- ジェンダーのインターセクショナルリティ(交差性)、またそれが個人のジェンダー・レンズにどう関わるかを参加青年間で明らかにする。
- ジェンダー平等問題に対処する上で、明確に

設計された、素早く現実的な計画を立てるために必要なコミュニケーション、協調性、プロジェクト・マネジメントや優先順位付けといったスキルを養成する。

- d. 取り扱うジェンダー平等問題に向けた現実的な行動計画を立案できるようになる。

(3) 事前課題

個人課題

各参加青年は、事前課題のテンプレートに沿って、「ジェンダーと開発」についての自身の関与、知識、期待、考えを共有した。個人課題は、コース・ディスカッション I において使用した。

国別課題

参加青年は参加国ごとに、自国や自らのコミュニティにおける「ジェンダーと開発」に関する取組の優良事例を一つ挙げ、パワーポイントで紹介した。事例としては、参加青年が直接関わっている取組、もしくは地域の組織や、行政のプロジェクトを取り扱うこと。この課題は、コース・ディスカッション II で用いた。発表は、Pecha Kucha（ペチャクチャ）形式で行われた。この形式では、1スライド当たり1枚の図画を見せ（合計5図画）、全体で5分間の発表を行った。発表内容は以下を含んでいること。

スライド1：表紙 - 組織および取組の名前

スライド2：ジェンダーに関する問題

スライド3：実行の目的および活動内容

スライド4：成果・結果

スライド5：実行における課題

(4) 活動内容

有識者による基調講演

氏名・所属：Mr. Nery Ronatay・国連女性機関、女性・平和・安全保障部門プログラム・アナリスト、国連平和大学客員教授

要旨

絵を見てそれが男性に関するものか女性に関するものかを考えるクイズから活動が始まった。講演ではジェンダーの理論や概念、SDGsとの関連性についての議論が取り上げられ、ジェンダーの平等を達成するための国際的な手段として、国連婦人の地位委員会（1946年）、北京行動綱領（1995年）、女子差別撤廃条約（1979年）、女性・平和・安全保障に関する安保理決議第1325号（2000年）について

も言及された。

基調講演から学んだこと

- ジェンダーとは社会的な産物であり、我々はそれを再構築する必要がある。
- ジェンダーを二元論で語るのではなく、よりきめ細かい考え方をすべきである。
- 平等な扱いをするだけでは格差の是正とはならない。
- 不平等な扱いや差別は、時に、性別、人種、階級、国籍、所得など、複数の社会的カテゴリーの組み合わせに関係している。

コース・ディスカッション I

ねらい

- ディスカッションにおいて、参加青年との関係を築き、親密になるような空気づくりをする。
- ジェンダーと開発に関する基本的な概念や理論について議論する。

活動

- 参加青年は、コース・ディスカッションのテーマに対する各自の理解、期待、背景、経験について班に分かれて話し合い、その後全体に戻って共有を行った。ここで、個人課題を用いた。
- ジェンダーとは何を意味するか、その包含するところや、女らしさ、男らしさ、固定観念や分析、インターセクショナルリティ（交差性）などジェンダーを取り巻く要素を理解する重要性について議論した。

成果

- 生活圏の文化や経験、社会によって無意識に影響されているジェンダーに関する固定観念やバイアス（女性は家事をすべきなど）が存在している。
- 参加青年が身を置く地域社会、仕事や勉強している分野での個人的な経験から、ジェンダーにまつわる固定観念がいかに顕著であり、またジェンダー平等がいかに重要かが明らかになった。

コース・ディスカッション II

ねらい

- 社会経済的、また政治的なやり取りのミクロおよびマクロな観点に見られる「ジェンダーと開発」の取組について議論する。
- 「ジェンダーと開発」の取組に関する優良事例

について発表する。

活動

- a. ジェンダーに関するよくある問題や、いかに制度、衛生、政治、経済、環境などの諸相がSDGsに関連しているかを議論し、発表した。
- b. 参加国別に「ジェンダーと開発」の取組に関する優良事例を発表した。ここで、国別課題を用いた。

成果

- a. 「ジェンダーと開発」に関する概念や、SDGs目標5番目の「ジェンダーの平等を達成し、全ての女性と女児のエンパワメントを図る」、世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数及び「ジェンダーと開発」に対する戦略について学んだ。
- b. ジェンダーに関する問題の深刻度や優先度は国によって異なること、また様々な取組が行われているが、まだ目の前には課題があること、そして問題解決にはプロジェクトの「質」について考える必要があることを学んだ。

コース・ディスカッションⅢ

ねらい

- a. 「ジェンダーと開発」を促す上での青年の役割を左右するような課題や機会についてのアイデアを生み出す。
- b. ジェンダーに関する諸問題やそれへの介入について優先順位を付ける。
- c. 取り上げたジェンダー関連問題に対処し、ジェンダーのエンパワメントと平等を推し進める現実的な行動計画を立案する。

活動

- a. 認識や能力に基づいた実現可能性やインパクト分析についての議論とワークショップが行われた。また、青年の参加度合いに影響し得る機会や課題について議論した。
- b. 対処能力、時間軸、問題の重要性や緊急性に基づいた、優先順位付けの議論やデザイン思考のワークショップを行った。
- c. プロジェクト・マネジメントについて議論し、SMARTの法則を用いたグループ・ワークショップを行った。全体に向けて発表を行い、コース・ディスカッションの成果発表の準備として行動計画を改善するためのフィードバックがなされた。

成果

デザイン思考及び優先順位付けのワークショップでの成果として以下の行動計画が立案された。

- a. グループ1：（他の業界や国における）建設的な行いやプロジェクト、優良事例を真似る。
- b. グループ2：女性に対して、恐れず学習を進めることを促す特別なオンライン・プログラムを作る。
- c. グループ3：若い女性のためのロールモデルを紹介する。
- d. グループ4：ジェンダーにおける力の不均衡を減少させる。

(5) ディスカッション成果発表

成果発表は、ジェンダーの平等とエンパワメントが基本的人権であるだけではなく、平和で豊かな持続可能な世界の土台として必須であるという考えを提示することから始まった。3回のセッションと基調講演について紹介し、ねらい、活動、学んだことが概説された。発表では、女性の社会参画を増やす上で一人一人が関わり、インパクトを拡大するために、多様性と包括性がジェンダー平等の構成要素として強調された。最後には、グローバルな視野を持ちつつローカル規模の啓蒙活動や共同イニシアティブで何らかの行動を起こすことが参加青年たちに呼びかけられた。

(6) PYの声

- ・ジェンダー平等問題を取り巻く他国の状況に関し、以前に比べて大変多くの事柄を知ることができたように思う。これによって私の世の中の見方は変わり、平等や高い社会的地位に占める女性の割合、女性の安全や自由に関する問題の根深さを認識させてくれた。ディスカッションにおいていくつかの事例が紹介されるまで、他国での女性を取り巻く状況がいかに良好でないか考えも及ばなかった。私はこれまで、女性に関する不当な扱い、安全や平等の問題はこれまでになく注目されていると思っていた。実際にそうではあるものの、他の参加青年の発表や考え、経験、基調講演者やファシリテーターによる発表を聞いて、より多くの行動がなされる必要があると更に認識を強めるに至った。（スウェーデン）
- ・意見交換によって、とても良い結論と解決策を導くことができた。私はジェンダー平等問題について考えると大抵の場合、女性にとって社会がいかに難しく厳しい場所なのかを改めて思い知らされ、苛立ちや無力感にさいなまれるのだが、今回の議論を通じて、現状に対していかに我々ができること

があるかを知ることができた。更に、他国も同様な問題に直面しており、その中でもジェンダー平等問題がよりよく議論されている国があると知ることによって我々にできることは非常に多いと気付くことができた。（日本）

（7）ファシリテーター所感

ジェンダー平等問題は幅広いトピックであるため、参加青年の関心事と現況との関連性との間でバランスを取ることが求められた。ディスカッションで取り上げたトピックは、ジェンダーの平等とエンパワメントに向けたSDGs目標5に焦点を当てたものとなり、3回のセッションの中身は、参加青年が現在の仕事、学校、コミュニティに当てはまるようなトピックを検討するものとなった。

セッションは、バーチャル環境下ではあるものの、参加青年間で積極的に意見交換がやり取りされることを企図して設計された。初回及び2回目は、現在のジェンダー及び開発を取り巻く戦略についての問題点と気付きの基礎知識を身に着けることに繋がった。これらは、ディスカッションの終盤に向けて、青年による実現可能で現実的な行動計画を立案する

上で不可欠だった。

総括すると、このディスカッション・セッションは、参加青年がジェンダー平等問題を安全で協調的かつ建設的に話し合える場となった。参加青年から寄せられた声によれば、ジェンダーに関する課題や機会について自分たちのコミュニティにおいて話し合い続ける気概が認められる。参加青年たちは、令和3年度「世界青年の船」事業（オンライン）で築いた知識やネットワークを活かして、今後の取組に手と手を携える姿勢でいる。

「世界青年の船」事業において初めてのオンライン開催が成功裡に執り行われたことを、内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センター、同僚のファシリテーター、統率相談員、参加国の政府、参加青年や既参加青年の皆様に対してお慶び申し上げます。ファシリテーターの一人となれて光栄であったが、私は自らの知識や経験を共有しただけではなく、参加青年からも多くの学びをいただいた。事態が落ち着いたら、願わくは対面で交流し、美しい皆さんの国を訪れたい。Madamo nga salamat! どうもありがとうございました。

3. 経済問題

ファシリテーター：Ms. Aida May Bergado-De Guzman（心理学者、自営コンサルタント）

PY：17名

（1）ディスカッション分野

第四次産業革命（4IR）における青年の雇用

（2）ディスカッションの目標とねらい

世界では約7,000万人の青年が失業・不完全雇用状態にある一方、雇用主側は採用枠を満たせずにいる。この課題は、青年のスキルと雇用者の需要とのミスマッチが拡大していることに原因の一端がある。物理的な資産とデジタル技術の融合が特徴的な4IRが、社会、経済、雇用、そして人々の生活を大きく変える中、このままではこの問題が深刻化するだろう。

2030年までに、世界で18億人もの青年が労働市場への参加に必要なスキルや資格を持たなくなると推計されている。

デジタルを軸とした経済に対応できる次世代の労働者をきちんと育成できなければ、所得格差の拡大、失業増、政府の支出増、人々の移住増加などを招くことになる。

（出典：The Global Business Coalition for Education）

国連の持続可能な開発目標（SDGs）の目標8「すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用及び働きがいのある人間らしい仕事（ディーセント・ワーク）を推進する」を取扱い、このコースでは参加青年が4IRに備えて、自身に最適なキャリアを歩み、より良い生活を送り、それぞれのコミュニティでより活躍できるよう促すことを企図している。

修了時には、参加青年が以下のようになっていることを目指す。

a. 4IRとそれが青年の雇用へもたらす影響についての知識を得て、青年の雇用に関する最新の

知識を得て、青年の雇用に関する最新の

動向と問題を認識する。

- b. 自らの強みが何かを知り、優先順位や志向を明確にすることで、より自信を持って目標設定やキャリアプランの構築ができるようになる。
- c. WIIFMs（自分にとって何の得があるのか）と WROMs（自分に何が求められているか）を知って自分事として関与し、4IRにおける青年の雇用を促進する取組を生み出すことに尽力する。

（3）事前課題

個人課題

- a. 4IRについての課題図書
- b. 4IRについての動画視聴
- c. 就業準備、ソフトスキル、テクニカルスキル、起業家的スキルに関して、各参加国における青年の雇用についての文献。
- d. 4IRに対して（優先順位と競争優位性の観点から）どれだけ準備ができているかの自己評価。
- e. 自社の社員や就職希望者に共通して必要となる能力とその理由について、リーダー的職位の人事プロフェッショナルに対するインタビュー及びディスカッション。また、インタビューを振り返ったのインサイトペーパー。

（4）活動内容

有識者による基調講演

氏名・所属：Dr. Karen D. Sacdalan, Rppsy・心理学者、Lee Hecht Harrison Philippines、デ・ラ・サール大学助教授

演題

4IR下の雇用に向けて青年を意識させる

基調講演から学んだこと

- a. 産業や仕事の状況は急速に変化しており、我々は準備として常に自身と労働市場について見つめる必要がある。
- b. 4IRで必要とされるスキルは、業務に対しての準備具合、ソフトスキル、テクニカルスキル、起業家精神の四つであり、我々にとって、より就職を容易にし、ディーセント・ワークを手に入れられるようにするためには、これらを身につけることが必要である。
- c. 本当に自分に合ったキャリアを構築するためには、以下3点に沿う必要がある。1点目は、デジタル化の中で時間や優先順位を見直す「再想像」。2点目は、最も価値のある知識や、最

も必要とされるスキルや価値は何かを見極める「再認識」。3点目は、就職活動やビジネスチャンスに成功裡に迎えるための計画を（再）始動する「再更新」である。

コース・ディスカッション I

4IR及び4IRが青年の雇用に及ぼす影響

ねらい

- a. 4IRについての理解を深める。
- b. 4IRが青年の雇用に与える影響を知る。
- c. 青年の雇用に関する最近の問題や動向を知る。

活動

- a. アンケート、雰囲気作り、アイスブレイキング、自己紹介
- b. 本コース・ディスカッションに期待していることの擦り合わせ、共通ルール作り、ディスカッション導入
- c. 4チームに分かれてのワークショップ：4IR下での雇用についてのSWOT分析
- d. ワークショップでの成果についてのグループ発表
- e. 本日学んだことの共有
- f. まとめ

成果

- a. 参加青年は、雇用という文脈における自らの強み、弱み、機会、脅威を認識でき、4IRについての理解を深めた。
- b. 参加青年は、SWOT分析を用いて批判的思考力を高めることができ、その結果として、4IRが自分たちの雇用に与える影響について洞察することができた。自分を磨く継続的な学習が最重要点であった。
- c. 参加青年は、自分たちの強みと機会、弱みと脅威について更に話し合い、記録し、分析することで、どのような強みをいかし、弱みを強化し、脅威を排除し、あらゆる機会を探るべきかをより明確にすることができた。

コース・ディスカッション II

キャリア設計

ねらい

- a. キャリア上の競争力を測る
- b. 個人的・職業人的な志向に基づく優先順位付け
- c. 4IR下における雇用という文脈におけるキャリア・ロードマップ作り

活動

- a. アイスブレイキング、アンケート、雰囲気作り
- b. 前回の復習 -新しい発見や振り返り、気づき
- c. キャリア設計、また参加青年たちによる人事プロフェッショナルへのインタビュー結果のまとめについて、ファシリテーターによる講義
- d. 競争力、優先順位、志向について、個人評価に基づいた小グループでの共有及び議論
- e. 個人のキャリア・マッピングについての小グループでの共有及び議論
- f. 小グループでの議論の成果を全体で共有
- g. ファシリテーターによる講義とまとめ
- h. 個人で得られた学びの共有

成果

- a. 参加青年は、自身の競争力、優先順位、志向（個人的、職業的）に関するプロフィールを作成し、キャリアを選ぶ際に重要となる自分のキャリア上の資産に関する分析を深めるのに役立った。
- b. 参加青年たちは自身のロードマップを作成し、将来の職業人生に向けた詳細な道筋を描くのに役立った。そして現実的な短期及び長期のキャリア目標を設定し、その達成に必要なスキルやリソースを手にするための道筋を描く一助とした。このように、自分自身のキャリア・デザインを行った。

コース・ディスカッションⅢ

まとめ（行動、行動計画、意識向上に向けたキャンペーン）

ねらい

- a. 4IR下の雇用に向けた必要な段取りを踏む。
- b. 全ての回から学んだ内容をまとめ、行動計画、取組、意識向上に必要な関わり方を起案できるようにする。
- c. ディスカッション・セッションにおける学習とパフォーマンスを評価する。

活動

- a. ワークショップ・グループ活動：4IRにおける青年の雇用という領域で、「自分にとって何の得があるのか」と「自分に何が求められているか」を知り、自身のキャリア目標を達成するための行動を打ち立てる。
- b. ワークショップ・グループ活動：グループの行動計画及び取組。

- c. #YOUTHfor4IR：「気付こう、やってみよう、関わろう」というコースのキャッチフレーズを用いて、他の青年や関係者に向けた意識向上キャンペーンを起案する。
- d. ワークショップでの成果をグループで発表する。
- e. メンチメンターというツールを用いた、所感・主要な学びの振り返り。
- f. ファシリテーターによる講義とまとめ
- g. 総括

成果

- a. 参加青年は、自らの「自分にとって何の得があるのか」と「自分に何が求められているか」を明らかにした。これはすなわち、参加青年の行動（何をやめ、何を続け、何を始めるべきか）と、キャリア目標の実現と雇用（自営業、起業家、他者に雇用されるなどの形態を問わず）を確かなものとするための原動力だが、その結果、参加青年の多くが起業家精神の旺盛な傾向にあることが分かった。
- b. 参加青年は、4IRにおいて雇用とディーセント・ワークのために何をどのように準備すればよいかを知った上で、それぞれのコミュニティでより適切な存在となるための取組に重点を置いた行動計画を作成した。
- c. 参加青年は、#YOUTHfor4IR：「気付こう、やってみよう、関わろう」というコースのキャッチフレーズを用いて、他の青年や関係者に向けた意識向上キャンペーンを起案した。こうしたことが、4IR下で自身の思い描いたキャリアを実現する際の問題や懸念に向き合うことを促すのに繋がるだろう。

(5) ディスカッションの成果発表

全3回のセッションを終え、参加青年たちは、次のような学びを得た。

- a. 自身のキャリアを再考する機会を得た。
- b. 4IR下の雇用という話題で、異なる視点や考えを共有することにより、勇気付けられ、楽しむことができた。
- c. 今後のキャリア目標達成に必要なスキルやリソースを習得する意欲が湧いた。
- d. 自分のキャリア上の競争力、優先順位、志向を把握した上で、起業や自営業に踏み出す後押しを得た。

(6) PYの声

- ・この事業で、自分のキャリアをより深く見つめ直し、学び続けなければならないと思った。多くのことを学んだと共に、世界中からの参加者やファシリテーターに励まされた。(日本)
- ・ものの見方や意見を交換することによって何が生まれてくるかを、とても楽しむことができた。トピックに対する理解、そしてさらに重要な相互理解を深めることができた。(スウェーデン)
- ・この事業を通して、コロナを言い訳にせず、自分ができることを精一杯やっていきたいと感じた。(日本)
- ・これからも学び続け、スキルを身に付けたいと参加者の多くが話していたことに驚き、私の大きなモチベーションとなった。(日本)
- ・異なる話題で異なる視点を共有する良い機会となった。新しいことをたくさん学ぶことができ、一連のディスカッションをとても楽しむことができた。(スリランカ)
- ・参加者のさまざまなキャリアパスを聞くことで、自分の進むべき道を改めて考えることができた。(日本)
- ・この事業で4IRに関する知識を得て、勇気付けられた。(南アフリカ)
- ・この事業に参加する前はコロナ禍で狭い視野だったのが、改めて世界の広さを感じた。今後は、多くの人と交流し、新しい着想を得ていきたい。(日本)
- ・起業家となって事業を興したい。(日本)
- ・大満足！やる気が出た！とても楽しかった！(ポーランド)
- ・経済というテーマを選んだ時、大学のように退屈になるだろうと思っていた。しかし、触発される情報を目の当たりにして驚くこととなり、将来に向けて計画を立て、考えていこうと思う。自分のキャリアについて考え直すいい機会になった。(オマーン)

- ・最高のディスカッション・セッションだった。(オーストラリア)

(7) ファシリテーター所感

令和3年度「世界青年の船」事業（オンライン）は実に充実した経験となった。世界各地から集まった現代の青年たちに耳を傾け、彼ら彼女らがこのデジタル化の時代に社会により大きな影響を与えることができ、自分に合い、自分の可能性を最大限にいかせるキャリアに向けてどう準備しているかを目にすることは、私自身の視野を広げてくれた。参加青年が、この学びの旅で得たエネルギーと情熱を持ち続け、それぞれのコミュニティに戻って、より重要な存在となることを祈念している。

この事業は、参加青年とファシリテーターに対して土台を提供し、適切なコミュニケーションを確保することで、とてもよく運営されていた。非常に練られた実施計画があったことが、事前研修でのミーティングや活動、コース・ディスカッション後の運営事務局との振り返り、そしてコース・ディスカッションの成果発表などにも表れていた。日本参加青年の繋ぎ役を各コース・ディスカッションに配置したことは、参加青年間のコミュニケーションにおける大きな助けとなった。また、内閣府と本事業の事務局スタッフが常に伴走してくれたことは、我々ファシリテーターにとって心強いサポートとなった。

令和3年度「世界青年の船」事業（オンライン）に参加する何年も前に私は「東南アジア青年の船」事業の参加青年であり、その後ファシリテーターも務めたことがある。未来のリーダーを育成するこの事業に再び参加し貢献することで、世の中に変化を生み出し続ける機会を与えてくださり、内閣府の皆様には感謝申し上げたい。皆様の一致団結した努力に対して、頭が上がらない。是非、この事業の火を絶やさず灯し続けていこう。

4. 環境問題

ファシリテーター：Dr. May Ali Khalfan（バーレーン大学工学部建築・インテリアデザイン学科助教）

PY：20名

(1) ディスカッション分野

本コースは全体として環境問題に関する分野を

扱った。人類は地球上の多くの資源を利用しており、それらの資源への日々の需要と世界の人口増加が

相まって、破壊的な不均衡状態が生まれてきた。気候変動は、様々な形で見られるようになったその状態の一つの表れである。コース・ディスカッションの中で参加青年たちは、持続可能な開発目標（SDGs）に含まれる環境関連の以下の3つの目標について考察し、議論した。a) 気候変動に具体的な対策を、b) エネルギーをみんなにそしてクリーンに、c) 住み続けられるまちづくりを、である。

（2）ディスカッションの目標とねらい

参加青年は、このコースを通して以下のことを習得する。

- a. 基調講演を通したSDGsの内容と重要性についての理解。
- b. ディスカッション・セッションを通した3つの目標に関する集中的な考察。
- c. 事前課題への取組とコース内でのやり取りを通した知識の習得と共有。各参加青年は、それぞれの国における環境問題への取組について発表する。これによって、参加青年はまずディスカッションのトピックを理解し、自分の国でどのような対策がなされているかについて考察するとともに、他の国々での取組との差異や類似性を知ることができる。
- d. 参加青年は、ブレインストームと新しい解決方法を提案する機会を得る。これによって、扱っているテーマについての思考方法を広げることができるとともに、一人一人が環境問題にどのように取り組むことができるのかを知ってエンパワーされることになる。

（3）事前課題

個人課題

参加青年には、各ディスカッションの前に課題が出され、グーグルフォームを使ってオンラインで提出するよう指示された。さらに、ディスカッションの前に自由に読むことのできる参考資料も事前配布された。コース・ディスカッションⅠの事前課題は、a) それぞれの国における気候変動の影響を調べる、b) それらの影響に対して、どのような対策が取られているかを列挙する、というものであった。コース・ディスカッションⅡの事前課題では、グループごとに指定されたケーススタディを読み、各自以下を提出した。a) ケーススタディに対する個人的な考察、b) 自分の国における現在と将来のエネルギー源について調

べたもの。コース・ディスカッションⅢの事前課題は、各自の住む都市の現状について、以下の項目でマインドマップを作成することであった。近隣地域の特徴（道路のサイズ、歩道の設置状況、建物の密度と高さ）、オープンスペース（公園、庭園、緑地）の存在、人々の交流、交通、生活に必須なモノやサービスが近くで手に入るか。マインドマップに書く内容と見本が、事前に参加青年に提示された。

（4）活動内容

有識者による基調講演

氏名・所属：Dr. Maysoon Nedham Awadh・バーレーン大学理学部生物学科助教授

要旨

基調講演は5つのパートで構成された。パート1は、SDGsの成り立ちや重要性、柱となること、そして目標間の関連性についての全体的な情報であった。パート2は、SDGsの中の環境に関連する5つの目標、すなわち「エネルギーをみんなに。そしてクリーンに」、「住み続けられるまちづくりを」、「気候変動に具体的な対策を」、「海の豊かさを守ろう」、「陸の豊かさを守ろう」そして「パートナーシップで目標を達成しよう」が扱われた。パート3では、パート2で扱われた目標に関するバーレーン王国の取り組み例が紹介された。パート4では、最近講演者自身も参加して行われた「Youth response and awareness level of Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標に関する若者たちの取組と意識レベル）」という研究の結果が紹介された。この研究は国連SDGsに対するバーレーン王国の若者の意識レベルを調査したものである。最後のパート5は、二人の若いバーレーン人大学生も加わって、若者たちの行っているプログラムの一つが紹介された。これはブリティッシュカウンシルとバーレーン高等教育省が行っている「アクティブシチズン（行動する市民）」プログラムの一つである。同プログラムでは、若者たちが地球的気候変動への解決策を考え出すよう促している。

基調講演から学んだこと

- a. 今の時代に持続可能な開発目標を取り入れ、活用することの重要性。
- b. 気候変動対策の促進を担う若者のエンパワメント。
- c. 全て目標に取り組むことの必要性和、その中でも気候変動対策が最優先であること。
- d. 気候変動対策は地球上の一部の地域の問題で

はなく、全ての国が取り組むべきものであること。

コース・ディスカッション I

ねらい

- a. 気候変動に関する知識を得る。
- b. 世界中で行われている活動についての体験を共有する。
- c. 個人でできる気候変動対策の案を出す。

活動

- a. アイスブレイキング
- b. 気候変動の影響（動画）
- c. グループ・ディスカッション1：気候変動の影響と各国の直面するであろう課題及び気候変動対策として行われている活動
- d. ディスカッション2：我々は個人としてどのように貢献できるのか。

成果

- a. 参加青年は、気候変動の重大さと、一部の国が他の国と比較して特に被害を受けやすいということについて理解することができた。
- b. 参加青年は、気候変動対策には世界レベルの協力が必要であること、この問題に積極的に対応するために各国が法律や政策を承認し始めるべきであることを認識した。
- c. 参加青年は、個人レベルでも貢献できることを認識した。

コース・ディスカッション II

ねらい

- a. 参加青年が世界で使われている様々なエネルギー源を知ること。
- b. 代替エネルギー源を利用することの重要性に気付くこと。
- c. 気候変動とエネルギー利用を関連付けること。
- d. 代替エネルギー源の利用可能性を評価すること。

活動

- a. 気候変動とそれへの対応として各国で行われている活動についての参加青年からの発表。
- b. 参加各国におけるエネルギーミックス（発電方法の組み合わせ）の状況をワードクラウドを使って見てみる。
- c. グループ・ディスカッション1：ケーススタディについて議論し、持続可能なエネルギー利用を理解する。
- d. グループ・ディスカッション2：参加国における

エネルギーミックスについて検討し、代替エネルギー源利用の可能性を評価する。また、それらの代替エネルギーへの転換に向けてどのような可能性と障害があるかを考える。

- e. グループごとに結果を発表する。

成果

- a. 参加青年は、様々な種類の再生可能なエネルギー源について知識を得た。
- b. それぞれの国での様々な可能性と制約を検討し、それらのエネルギー源の効果や利用可能性を評価した。
- c. 参加青年は、気候変動と非再生可能エネルギーの利用が直接関連していることを認識した。
- d. 参加青年は、クリーンエネルギーへのシフトには世界規模での更なる行動が必要であることを認識した。

コース・ディスカッション III

ねらい

- a. 都市の抱える問題について知識を得る。
- b. 都市における持続可能性とレジリエンスの重要性に気付く。
- c. 知識をシェアして都市の現状を評価する。
- d. 未来都市の意義を考え、視覚化する。

活動

- a. Sustainable Future City（持続可能な未来都市）（動画）
- b. グループ・ディスカッション1：作成したマインドマップをもとに、各国の状況を話し合う。
- c. グループ・アクティビティ2：未来都市を想像し、社会課題や環境問題にどのように対処し得るかを思い描く。
- d. グループごとに発表

成果

- a. 参加青年は、世界の都市の多様性に気付いた。
- b. 参加青年は、気候変動やクリーンエネルギーと持続可能な都市との関係を認識した。
- c. 参加青年は、「住み続けられるまちづくり」の目標に関連する全ての側面に取り組むような未来都市のモデルを思い描くことができた。
- d. 各自の住む都市について話し合う中で、持続可能な都市に必要な社会的な要素についても検討した。

(5) ディスカッション成果発表

5人の参加青年から、環境コースでの学びについて発表があった。発表は、大きくは5つのパートからなっていた。最初のパートは、発表全体の導入と、本コースの重要性、コースの概要、そして発表の要旨をカバーした。パート2、3、4は、各セッションで参加青年の行ったアクティビティやディスカッションに焦点を当てた。パート5では、まとめと締め言葉、そして環境問題コースからの学びが示された。発表者は最後に、出席した人たちが個人としてできる気候変動対策へのインスピレーションを得られるよう、メンチメーターを使って作成されたワードクラウドを紹介した。

(6) PYの声

全体として参加青年は、コース・ディスカッションを楽しんだようである。

- ・コースは役立つ情報がとても多く、参加しやすい雰囲気であり、多くの知識を得ることができた。(オマーン)
- ・環境コースは最初から最後まで楽しかった。問題を異なる視点から見つつ、最後には意見をまとめるのが面白かった。(日本)
- ・コースは楽しかった。ディスカッションや小発表に多くの時間を費やすことができたので、多様な視点からとても多くのことを学ぶことができた。(日本)
- ・コースはとても興味深かった。例えば国連の環境ケーススタディや持続可能な都市プロジェクトなど、私の知らないことがたくさんあった。扱われたトピックがとても面白かった。(ロシア)

今回はオンラインで行われた最初の「世界青年の船」事業となったが、参加青年の大部分は事業を対面の形で開催するよう提言している。

- ・みんなで直接会って、オンラインではなく対面でディスカッションやアイデアの共有を行えば、この事業は非常に有意義なものになるだろう。(スリランカ)

もう一つ多くの参加青年に共通していた意見は、ディスカッションの時間を長くすることと、参加青年全員での導入の日を設けることである。

- ・自己紹介デーのように、お互いを知るための日がディスカッションの前にあると良かった。(日本)
- ・ディスカッションにもう少し時間が欲しい。また、コー

スメンバーとさらによく知り合うための時間があれば、より良いディスカッションができるだろう。(日本)

- ・お互いを知るための時間がもう少しあっても良いかもしれない。(スウェーデン)

コースの構成について見てみると、上にも述べられているように参加青年が最も楽しんだのはディスカッション部分だったようであり、楽しかった活動のもう一つは未来都市についてのディスカッションだったようである。

- ・チームメンバーとのコミュニケーションがコースで一番楽しい時間だった。(日本)
- ・最後のセッションで行った、未来の都市を想像してみるアクティビティが楽しかった。(日本)

(7) ファシリテーター所感

私は「世界青年の船」事業の既参加青年なので、ディスカッションコースのファシリテーターに選ばれ、この素晴らしい事業に再び参加できるようになった時は心から嬉しかった。参加青年だった時の経験は、周りの世界に目を開かせてくれるものだった。学びと世界各国からの青年たちとの語り合いが自分に自信を持たせてくれ、違いを認め、寛容さを学び、世界の様々な課題を知る機会となった。今回のディスカッションコースを通して、参加青年とともに私自身も学びを得ることができた。学术界に身を置き、日頃は教師として教える形の思考に慣れているので、このコースではディスカッションを通して教育するという異なる手法に接することができた。私の役割は、事前課題とディスカッショントピックの選択を通して学びの場を作ることであった。参加青年は積極的にディスカッションに参加していた。また、フィードバックを見ると、参加青年がコースを楽しみ、お互いから学び合ったことが分かる。学びの旅は終わりの無い旅である。今は、マウスのクリック一つで容易に情報を得ることができる。必要なのは、その情報を正しい方向に導くことだけだ。所感を締めくくるに当たり、私はこの事業がオンラインという難しさを抱えながらもその目的を果たしたと考えている。参加青年は、世界規模の友人のネットワークを作り始めており、地球の他の部分で何が起きているのかを知るようになっている。そして参加青年たちは、自分たちが変化をもたらすことができるということをこれまで以上に認識しており、これこそが「世界青年の船」事業の真髄であると言えるだろう。

第4章 ワークショップ

参加青年が主催者となり、参加各国の歴史、文化、伝統やライフスタイル等の紹介を行うワークショップ・セッションを行った。自発的なアイデアによる様々なワークショップがあり、企画、運営の全てが参加青年によって行われ、それらのセッションを通して主催者と参加者の相互理解と親交を深めた。二日間の日程で計11のワークショップが開催された。令和4年2月12日に実施された成果発表では、ワークショップで学んだ成果を全体に発表した。

1. ワークショップ一覧

国名	ワークショップの題名	主催者*	ワークショップの目標	ワークショップの概要
オーストラリア	Tucker オーストラリアの食に舌鼓を打つ!	A01 A03	オーストラリアの特に象徴的な食べ物や、歴史と結びついた伝統的な食べ物に焦点を当て、オーストラリアの食文化について参加者に伝えること。	象徴的な食べ物を作りながら、歴史的・文化的な見識を深める食文化紹介。ブッシュフード（オーストラリア内陸の奥地で手に入る食物）、オーストラリアを代表する食べ物、オーストラリアへの移住がこの国の食の風景に与えた影響など、いくつかのトピックを取り上げたセッションを行った。参加者がアクティビティに参加することを目的としたインタラクティブなセッションを二回行い、ダンパーブレッドとフェアリーブレッドを作った。オーストラリアの多様な文化、オーストラリアの景観、昔から土地を所有する人々、そして膨大な歴史が、私たちが食べるものにどのような影響を及ぼしてきたかを参加者に理解してもらうことをねらいとした。
日本	日本語で名前を書こう!	J16 J21 J31 J40	参加者に日本文化、漢字とカタカナを伝えること。漢字とカタカナを書くことは、日本文化に触れる簡単な方法の一つであり、自分の名前を漢字やカタカナでどのように書くのかを学ぶ。	導入では、日本語の文字には三種類（ひらがな、カタカナ、漢字）があることを説明した。その後、漢字の構成を説明し、主催者の名前を例にして、漢字にはそれぞれ意味があることを伝えた。実践編では、参加者が自分の名前を漢字とカタカナで書いて楽しんだ。また、各自の名前に使われている漢字の意味も説明した。最後に、日本語で書いた自分たちの名前と一緒に写真を撮った。
	武道に挑戦しよう!	J01 J10 J15 J19	参加者と共に空手を楽しむこと。柔道、空手、なぎなた、剣道の四つの武道とそれらに込められた日本の伝統的な精神を学ぶ。参加者が日本について少しでも知り、そして訪日してくれることを期待する。	- 日本の伝統的な武道精神と、柔道、空手、なぎなた、剣道の四つの武道についての説明。 - 空手の基本的な練習方法（突き・蹴り）の紹介。 - 空手の基本動作の練習とその使い方のコツを指導。

* 主催者欄には参加青年のIDを掲載



ポーランド青年による「ポーランド国内のボランティア団体について」の発表の様子



スウェーデン青年による「文字やゲームを通してスウェーデンとスカンジナビア古語を学ぼう」の発表の様子

ワークショップ主催者として、この経験から何を得たか	参加者の声
参加者を惹きつけ、誰もが気持ちよく質問やコメントをできる方法を学んだ。参加者が理解できるように、ゆっくり、はっきりと話すことを心がけた。食の紹介であっても、歴史や移民の動向を通じて、社会問題や多文化国家であるオーストラリアの特徴を説明する役割を果たすことができた。調理時間の短縮と参加者への情報提示をより充実させるために完成品を用意することになり、プレゼンテーションの内容を追加することになった。自分たちで考え、その場で行動し、チームとして協力する方法を学んだ。	・オーストラリアの食や歴史について、一般には知られていないことを学んだ。 ・既に知っているオーストラリアを代表する食品について、楽しく見て学ぶことができた（例：ベジマイト、ティムタム）。 ・ブッシュフードや伝統的な食べ物について学ぶことができた。 ・料理のデモンストレーションを楽しんだ。
マネジメントやパワーポイントのスキルなど、ワークショップの運営方法を学ぶことができた。オンラインで様々な国の参加者とワークショップを行うことができたのは貴重な機会となった。日常的に何気なく使っている漢字を英語で伝える方法を学んだ。また、事前登録をしていない参加者が予想以上に多かったり、参加者によってはネットワーク状況が不安定になるなど、想定外の事態への対処法も学んだ。そのような状況でも、できるだけ参加者に楽しんでもらいながら、ワークショップを開催することを心掛けた。	・自分の名前を漢字で書くことを楽しみ、その意味を学んだ。 ・漢字の歴史について知ることができた。 ・事前登録の有無にかかわらず、漢字とカタカナの両方を楽しんで使った（事前登録者：漢字を使用、未登録者：カタカナを使用）。
・プロジェクトマネジメント能力（チーム管理、時間管理、プロジェクト計画、タスク管理）。 ・ワークショップを主催するために、組織的にスケジュールを管理すること。 ・英語でのプレゼンテーション能力（外国人参加者に日本文化をどう伝えるか）。 ・オンラインツール（Zoom、canva、Youtube、google slide）を活用するスキル。	・武道を全く知らずに参加したが、武道の種類や空手の練習の基本を学ぶことができた。 ・上段回し蹴りは難しかったが、前蹴りはできるようになった。 ・体を動かしてリフレッシュすることができた。

国名	ワークショップの題名	主催者*	ワークショップの目標	ワークショップの概要
日本	オンラインコーラスで世界を元気に！ SWYからのメッセージ	J04 J13 J35 J36	新型コロナウイルス感染症の影響で、最近ではみんなで歌うことができなくなっている。日本の音楽文化を紹介し、参加者と音楽について語り合うことを目標とした。ワークショップのメイン曲は「上を向いて歩こう」であり、世界を、そして参加者全員を元気づけたいという思いが込められている。また、成果発表に向けてみんなで合唱のビデオを作成すること。	主に、日本の音楽文化と日本の有名な歌「上を向いて歩こう」を紹介した。そして、この曲を全員で歌い、最後にそれぞれの好きな音楽について話し合った。ワークショップの後、SWY Online参加者からビデオや画像をもらってコーラスビデオを作成し、成果発表で披露した。
	Why Japan？ 日本のビジネス文化を理解するための道	J12 J22 J32	・国際化社会に対応するため、ビジネス慣習の多様な文化的背景を理解すること。 ・国際的なキャリア形成のための様々なビジネス慣習を知ること。	ワークショップは、参加者の国のビジネス文化を表す言葉を交換することから始めた。その後、就職活動、キャリア形成、日常習慣の三つの観点から日本のビジネス文化を紹介していった。プレゼンテーションでは、応募、転職、上司とのコミュニケーションについて意見を出し合った。事例紹介の後、過重労働の考え方の共通点と相違点について話し合い、経験を共有した。
ニュージーランド	ニュージーランド体験 アオテアロア・ニュージーランド	N01 N03	参加者全員に歴史、文化、伝統を通して、情報満載で魅力的な方法でニュージーランドを体験してもらうこと。	参加者がニュージーランドの中から、訪れてみたい場所を選び、グループ内で共有するというアクティビティを行い、ニュージーランドについて学んでもらう一例とした。歴史の基礎を紹介し、歴史的基盤や女性に初めて選挙権を与えた国であることなど、象徴的な出来事を説明した。最後に、参加者全員が先住民族であるマオリ族の言語テ・レオ・マオリにて自己紹介を意味するpepehaを声に出して練習した。
オマーン	アラビア文化	O01 O02 O04	・アラブ文化を学ぶこと。 ・異文化に関わるプログラムなので、自国文化を他の参加者と共有すること。 ・アラブの習慣やアラビア語の美しさを知ってもらうこと。	今回のプログラムは異文化交流ということで、アラブの習慣やアラビア語の美しさを紹介しながら、私たちの文化を参加者に伝えた。まず、オマーンの服装を紹介し、アラブ人の歓迎の習慣やアラビア語での名前の書き方について話した。最後に、アラビアの装飾を施したしおりの作り方を学んだ。

* 主催者欄には参加青年のIDを掲載

ワークショップ主催者として、この経験から何を得たか	参加者の声
異なるバックグラウンドを持つメンバーと一緒にプロジェクトを作り上げるという体験を通して、ワークショップの準備過程で仲間になり、徐々にお互いを理解することができた。また、参加者との双方向の関係を通して、セッションをより良い場にすることもできた。チームワークを学ぶことができ、新しい仲間と一緒に作業を行うことは楽しかった。また、音楽は言葉の代わりとなる良いコミュニケーションツールであり、たとえ言葉が通じなくても、歌ったり、踊ったり、楽器を演奏したりすることで、コミュニケーションを取ることができるということを学んだ。	・日本の音楽を知ることは楽しかった。いろいろな種類の音楽やセッションで歌った歌はとてもすばらしかった。 ・音楽は言語を介さない国際交流の最も素晴らしい方法である。 ・海外の音楽教育を知り、日本の名曲が海外でも知られていることに喜びを感じた。
・日本の雇用制度や働き方の歴史と理由を理解した。 ・オマーンとロシアの参加者から、転職や過重労働に対する意識を学んだ。 ・発表の際、選択質問にすることで参加者とすぐに交流できた。	・キャリアカウンセラーの仕事にとっても役に立った。 ・日本での就職を夢見ているので、現実を知る良い機会になった。 ・日本企業はスキルよりもポテンシャルを重視する傾向があるなど、インターネットでは得られない内容を知ることができたことが一番よかった。
・初めてZoomでプレゼンテーションをするという経験ができて、本当に新鮮だった。初対面の人とどう接するかを学ぶ良い機会となった。 ・海外の方へのワークショップは初めてだったが、参加者が成果を得る魅力的な内容にすることができ、成功したと思う。ワークショップ主催者として、目的を達成できたと考えている。	プレゼンテーションが良かったかどうか聞いたところ、全参加者が画面越しに親指を立てて「楽しかった」と言ってくれた。多くの人が参加してくれて、本当に楽しかった。
参加者にオマーンの文化を伝え、交流することによって、いつの日か彼らをオマーンに招待したいと思うようになった。	・アラビア語の名前の書き方が気に入った。 ・オマーンの文化が好きになった。 ・オマーン人の服装が好きになった。

国名	ワークショップの題名	主催者*	ワークショップの目標	ワークショップの概要
ポーランド	ポーランド国内のボランティア団体について	P01 P02 P03 P04 P05	ポーランドにおいて困っている人を助けるという経験と思いやりを参加者と共有すること。世界中の人々とどれだけ共通点があるのかを知り、有意義な時間を過ごすこと。また、さまざまな人道的活動に対する認識を高め、それについて議論すること。	ワークショップでは、まず、ポーランドのボランティア組織を紹介した。その多くは、困難な家庭の子どもたちが通う学校や、孤独になりがちなホームレスなど、様々な環境における人道支援活動に従事している。主催者の一人は、「noble gift」という活動で他者に手を差し伸べた経験を話した。ワークショップの後半では、ディスカッションが行われ、多くの参加者が自国での人道的活動について語り、私たちの視点や解釈にとって実り多いものとなった。
ロシア	現代と伝統のツールを用いたロシア文化の特集	R01 R02 R03	参加者にロシアの文化、歴史、ライフスタイルにおける最も重要かつ有名ないくつかの特徴を知ってもらうこと。また、ロシアについて親しみを持ってもらうこと。	R01が挨拶と感謝を参加者に述べ、ワークショップの内容を簡単に説明した。次にR03が、漫画や本のキャラクターとして有名なチェブラーシカについて説明した。R02がロシアにまつわる興味深いクイズを出題し、その答えにコメントをし、それぞれのトピックについて詳しく説明を行った。その後、R01が参加者に2種類のロシア語のアルファベットを説明し、R02が参加者の名前をロシア語でチャットボックスに入力し、参加者がそれを転記していった。最後に、全員がロシア語で自分の名前が書かれた紙を持って、スクリーンショットを撮影した。
スリランカ	アジアの奇跡の島・スリランカ	SL01 SL02 SL03 SL04 SL05	- 参加者にスリランカの文化を紹介すること。 - スリランカ料理や食習慣のユニークさを紹介すること。 - 言語を介しての文化交流を実施すること。 - スリランカを身近に感じてもらい、参加するSWYメンバーと深い友好関係を築くこと。	SL03の歓迎の挨拶でワークショップを始めた。次に、クッキングセッションの録画ビデオを流し、材料や作り方を分かりやすく紹介した。ビデオで紹介された食材について多くの質問が参加者から寄せられ、それらの疑問に答えた。その後、SL02による言語教室が始まり、スリランカでよく使われる主な単語10個を紹介し、発音の練習をした。参加者はより多くの単語を知りたがったので、それにも対応した。また、参加者から寄せられた質問に回答した。全体として大成功に終わり、チームとして実施して本当によかった。
スウェーデン	文字やゲームを通してスウェーデンとスカンジナビア古語を学ぼう！	SW01 SW02 SW03 SW04 SW05	スウェーデンの文化や伝統を楽しく伝え、少数民族の権利保護に関するディスカッションを行い、参加者が自分のアイデアや考えで貢献できるようになること。	ワークショップでは、まずアクティビティの順番について簡単なプランを示し、最初のアクティビティであるスウェーデンに関するクイズからスタートした。クイズではKahootというプラットフォームを使い、参加者はとても楽しんでいる様子だった。その後、ブレイクアウトルームで各参加者の国のマイノリティーの権利保護について話した。その後、メインルームに集まり、スウェーデンの各メンバーが全体に向けて話し合った内容を発表した。次に、北欧のルーン文字についてのプレゼンテーションをし、参加者に自分の名前を書いてもらい、最後に数分間のフィードバックタイムでワークショップは終了した。

* 主催者欄には参加青年のIDを掲載

ワークショップ主催者として、この経験から何を得たか	参加者の声
主催者としては、他国でのボランティア活動の様子を聞くことができ、嬉しく思った。世界各国の人道的活動の共通点や相違点を知ることができ、とても充実した時間を過ごした。異なる意見を聞き、異なる視点で物事を見ることができたことで、今後、最善の方法で人々を助けるためのプロジェクトを構成することができるだろうと信じている。	参加者はこのトピックに関心を寄せていた。実際、参加者の大半はさまざまな活動に従事しており、このテーマについて話す機会を持てたことを非常に喜んでいて。セッションのオープンな雰囲気や、誰もがオープンマインドでディスカッションできることを楽しんでいて。参加者がどれだけ多くの共通点を持っているかを知ることが、とても興味深いことであり、この経験は実りあるものだった。
・ワークショップでは、どんな状況でも道を切り開くことができるということを学んだ。人の持つ魔法や、人間としてのつながりを知ることができた。 ・冗談を交えて説明をすると、人は情報を記憶しやすいということを学んだ。	・ロシアの文化、特に地元の習慣や伝統について多くを学ぶことができた。言語だけでなく、この美しい国の豊かさを発見できたことは素晴らしいことだった。 ・ロシア語で自分の名前の書き方を学び、またロシアに関するクイズを作ったりして、とても素敵な時間を過ごした。ロシア代表団に感謝。 ・ロシア語の文字は英語と少し違うので難しかったが、自分の名前が少し違った書き方で表現され、特別な感情を抱くことができ、貴重な体験になった。日記にロシア語で自分の名前を書いた。 ・自分の名前をロシア語で書けるようになりたいとずっと思っていたので、とても楽しかった。また、クイズで、ロシアの文化についてたくさん知ることができ、とても魅力的なワークショップだった。
チームワークを発揮する良い機会となった。チームとして協力することで、タスクを達成する可能性が高まることを、ワークショップ・セッションで目の当たりにし、体験することができた。チームとして、全員のアイデアを尊重し、作業を始める前に計画を立てることの重要性に気づいた。また、私たちはそれぞれ異なった才能を持っており、適材適所の重要性を知った。私たちが得た経験は、一生価値のあるものとなるだろう。	・本当に楽しいセッションで、スリランカ料理についてあまり知らなかったが、とてもスパイシーでおいしそうだった。家でも作ってみたい。シンハラ語講座を開いてくれてありがとう。 ・語学の授業は素晴らしかった。新型コロナウイルス感染症が治まった後にぜひスリランカに行きたい。教えてもらった単語やフレーズは本当に役に立ちそうだ。 ・スリランカの食習慣がよくわかった。私は辛いものが大好きなのでいつかスリランカに行きたい。 ・スリランカは思っていた以上に驚きの連続だった。ワークショップで作った料理は、美味しそうで、よいビデオだった。
苦労した分、楽しく、参加者の反応もよかった。時間管理はもちろんのこと、準備や発表の構成も重要だと感じた。今回の経験は、プレゼンテーションや参加者を惹きつけることを通して、自分たちのリーダーシップや組織力を向上させる良い機会となった。クイズなどのゲームを通して、参加者が楽しんでいる様子を見ることができ、楽しい方法で参加者を盛り上げる重要性を感じた。また、メンバーの一人が体調を崩しても、全員がプレゼンテーションやスライドにアクセスできるようにしておいたのは、とてもよかった。	・内容の濃い素晴らしいワークショップだった。 ・タイムマネジメントが素晴らしかった。 ・バラエティに富んだ内容だった。 ・ブレイクアウトルームの活用が上手であった。 ・アクティビティ間の移行がスムーズであった。 ・チームワークが素晴らしかった。 ・ルーン文字で、楽しく自分の名前を書いた。 ・スウェーデンや少数民族について楽しく、興味深く学ぶことができた。 ・スウェーデンへの関心が高まった。 ・楽しいワークショップであった。

第5章 本事業に対する事業評価

1. 参加青年による事業評価

参加者に対してプログラム終了時に事業評価アンケートをオンラインで実施した。主な集計結果は次のとおり。
注：対象の参加青年76名のうち、73名が回答。回収率は96%となった。

値は小数第一位で四捨五入されている。

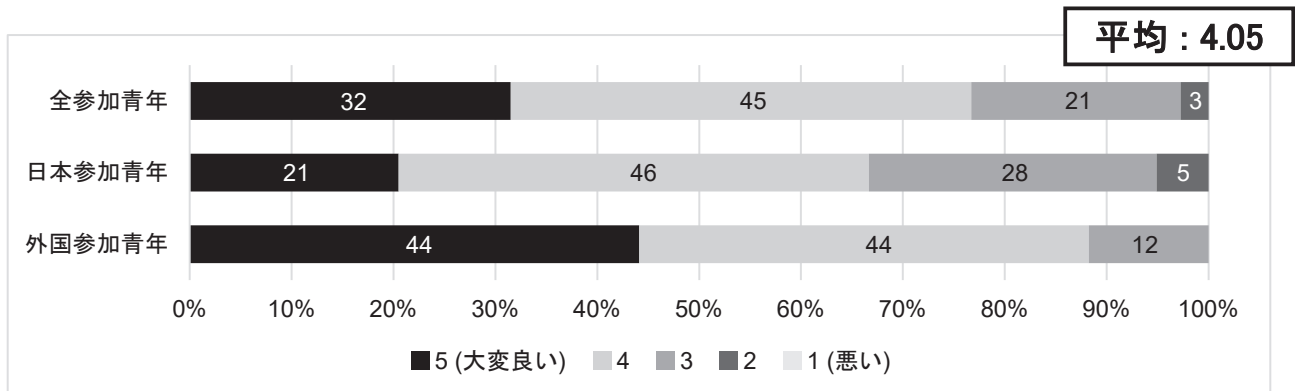
統計処理上、合計が100%にならないことがある。

事業全体に関しては全体平均は4.05で、77%の参加者が4以上（良い）と評価した。

本事業が各国からの参加者間の「相互理解を促進すること」及び「友情を築くこと」に貢献していると思うかとの問いに対し、それぞれ92%、85%が4以上（思う）と評価した。また、本事業への参加が社会貢献活動への参加意欲を高めたかという問いに対し、96%が4以上（そう思う）と回答した。

オンラインでの開催については、70%が「参加しやすい」に5以上（そう思う）と答えた一方、82%が「オンラインではなく対面事業に参加したい」に5以上（そう思う）と回答した。

Q. 事業をどう総合評価しますか。



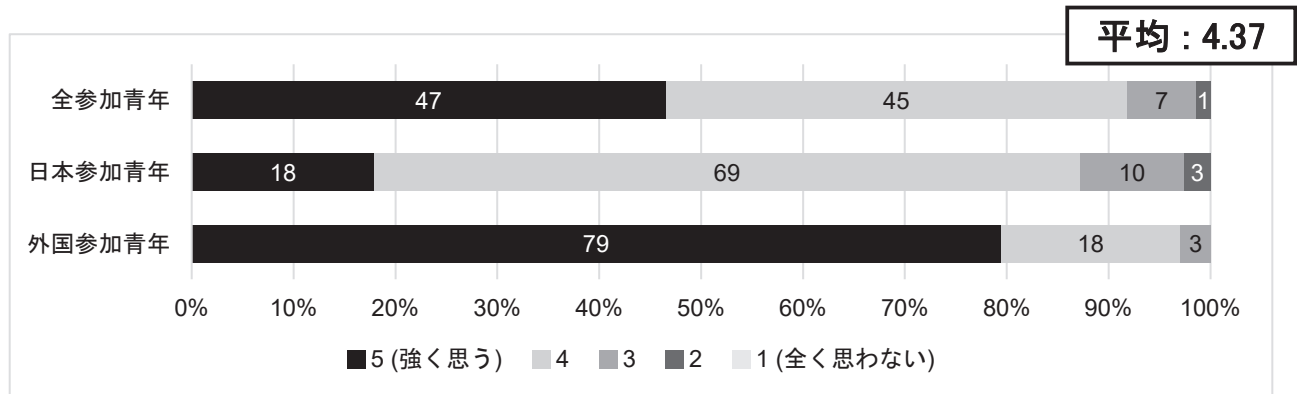
日本参加青年

- ・予想以上に素晴らしい時間を過ごすことができた。
- ・外国参加青年と彼らの国を理解する時間をもっと持ちたい。

外国参加青年

- ・対面式プログラムの代わりにはならないが、オンライン・プログラムとしては優れていた。
- ・とても役に立ち、重要な成果が得られた。どの国にも問題がある事を知った。

Q. この事業が、あなたと各国の参加者との相互理解を促進することに貢献していると思いますか。



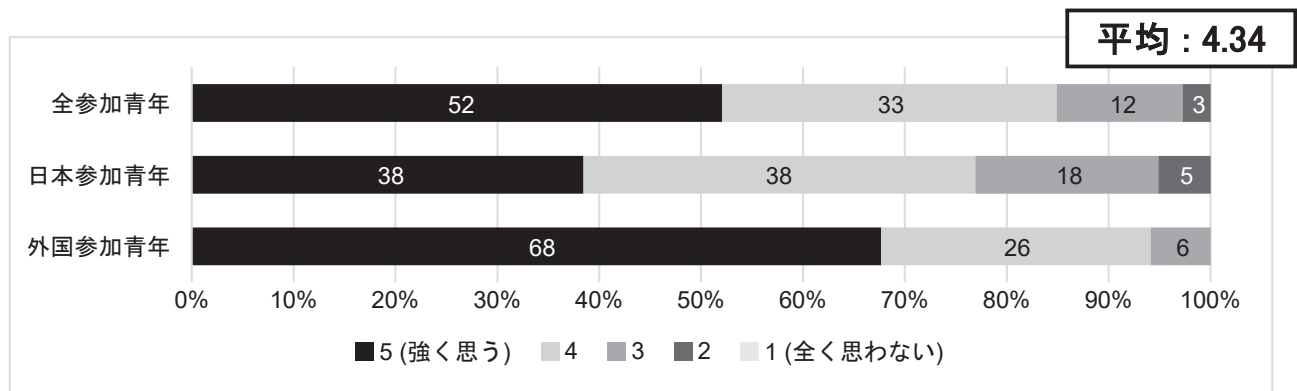
日本参加青年

- ・ワークショップ・セッションは相互理解に対する知識を深める非常に良い体験だった。
- ・外国参加青年の視点で他国や日本を知ることができ、楽しかった。

外国参加青年

- ・「世界青年の船」事業（オンライン）は他国について学ぶとても良い機会であり、尊重し合うことや言語、歴史、文化など参加国の様々な側面について理解することができた。
- ・異なる経験やアプローチを持つ人々と様々な問題について議論できたことは、大きな財産となった。
- ・外国参加青年との文化交流は、諸外国と日本に対する理解を深め、国際的な友好親善を促進する上で非常に重要な手段となった。国家間の相互依存が高まっている現在、文化交流を通じて、各国の言語、習慣、文化伝統などの社会的基盤に対する相互理解を促進し、国家間の人的交流を深めることがますます重要となっている。

Q. この事業が、あなたと各国の参加者との友情を築くことに貢献していると思いますか。



日本参加青年

- ・このプログラムは、参加者の「もっと世界を知りたい」という意欲をかきたててくれた。
- ・グループチャットやSNSでつながったことは、コミュニケーションを取るに当たってとても有効であった。

外国参加青年

- ・パンデミックの状況において新しい人々と出会う素晴らしい場だった。
- ・パンデミック終息後には、このプログラムで出会った素晴らしい青年たちに直接会いに行く旅を計画している。
- ・人と出会い、つながりを持つにはとても良かったが、オンラインであるためなかなか難しくもあった。

Q. あなたは、この事業からどのようなことを得ましたか。(複数回答)

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| a. 自分の国や文化への理解を深めることができた。 | f. 多くの友人を作ることができた。 |
| b. 自国への誇りを感じた。 | g. 自分の考え方に影響があった。 |
| c. 日本に対する理解を深めることができた。 | h. 転職を考えるようになった。 |
| d. 他の参加国への理解を深めることができた。 | i. その他 |
| e. よりグローバルな問題に関心を持った。 | j. 何の恩恵も受けなかった。 |

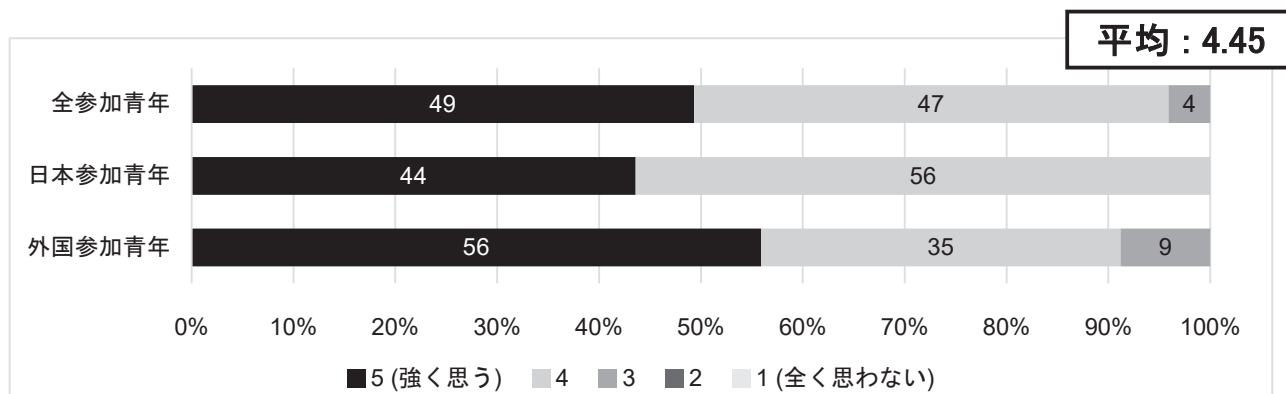
(人)

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
全参加青年	47	34	42	53	56	51	38	24	3	0
日本参加青年	22	11	14	28	31	24	20	15	2	0
外国参加青年	25	23	28	25	25	27	18	9	1	0

i. その他

- ・リーダーシップを発揮した経験
- ・男女間の不平等を変えていかなければならない。それが世界共通の課題であることをコース・ディスカッションで理解した。
- ・もっと起業家精神を持ち、日本語とアラビア語を学びたいと思うようになった。

Q. この事業への参加は、社会貢献活動へ参加したいという意欲を高めますか。



日本参加青年

- ・現在携わっている地元のボランティア活動の意義を再確認できた。将来的には、さらに積極的に関わってきたい。
- ・参加者から刺激を受け、社会貢献活動への意欲が高まった。
- ・この事業を通じて、自分の興味のあることを再認識した。

外国参加青年

- ・すでに活動している参加青年や、コミュニティをよくするための取組を牽引する学生の話を見て触発された。
- ・この事業のおかげで、良い将来像が見えてきた。

Q. この事業で得た成果を、事業終了後どのようにしていきたいですか。

現在の目標について記入してください。

日本参加青年

- ・新しい友人と多くの問題を議論し、新しい視点を獲得することができた。課題に対する情報や考え方を友人や家族に広めたい。
- ・これからも世界や自分の暮らす地域に対して行動を起こしていきたい。共通する問題意識を持ったり活動を

している参加青年がいたので、SWYの経験をもとにメンバーを増やし活動したい。

- ・LGBTQ社会を共創する団体を作りたい。

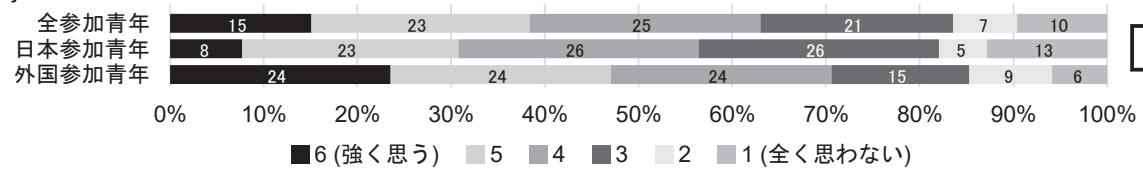
外国参加青年

- ・特に地方の子どもたちに、いろいろな人と話し合う機会を提供したい。
- ・参加青年と相互のプロジェクトを作りたい。パンデミックの状況が改善されたのちは、オンラインで、または可能であれば直接対面で集う共同ボランティアイベントを提案したい。
- ・この事業は、私に知識と自信、そして変化するための実践的なツールを与えてくれた。また、グループ内で効率的に仕事を進める方法や、与えられた機会を最大限に活用する方法についても多くを学んだ。今後は、身近な組織との関わりを増やし、旅行や国際的なイベントへの参加を通じて、異文化について学び続けたい。

Q. 以下の10項目について、オンライン事業に参加した感想はいかがでしたか。



j. オンライン交流だったため、集中力が途切れることもあった。



Q. オンライン事業の良かった点は何ですか。

日本参加青年

- ・パンデミックの時代にこのような国際的な事業にオンラインで参加できたことで、安心して様々な人々と交流ができた。
- ・働いている人や学生、様々な年齢層や専門性を持った人や忙しい人もが参加できた。
- ・場所を問わず、多くの人と交流したこと。家にいながら、新しい考えや新しい人に出会い、見聞を広めることができた。

外国参加青年

- ・プログラムが週末開催だったため、前回の内容を振り返ってから次のプログラムに臨むことができた。
- ・仕事や勉強を長期休めない人も参加が可能だった。
- ・一瞬でお互い顔を合わせることができ、トピックについても話しやすかった。

Q. オンライン事業の改善すべき点は何ですか。

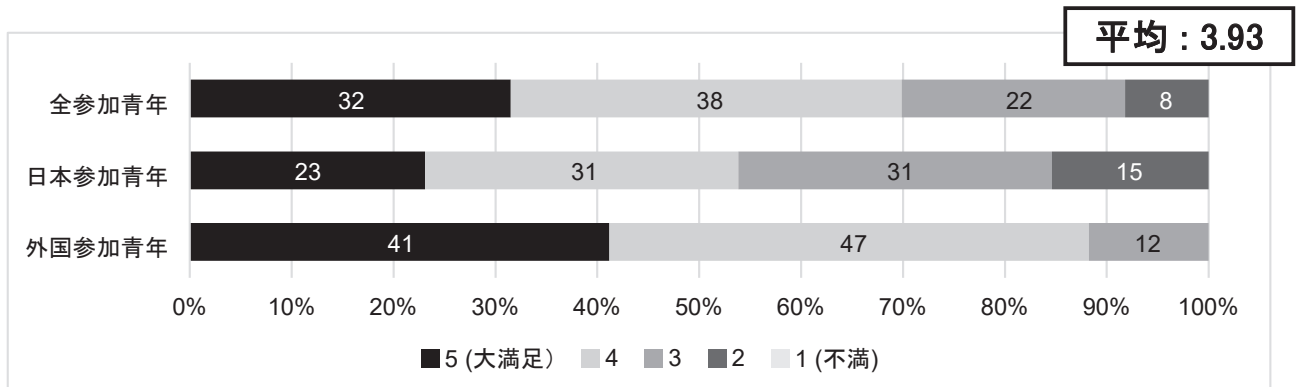
日本参加青年

- ・青年間で強い絆を築くことが困難であり、お互いを知るには時間が短かった。
- ・カジュアルな会話を行うことが難しかった。
- ・対面式のプログラムに比べ、コミュニケーションの密度が低かった。

外国参加青年

- ・話をしながらランチやコーヒーを一緒に取るといった対面での体験が欠けていた。
- ・インターネット環境が良くないという理由で参加できない人もいるかもしれないこと。
- ・プライベートな話や自然に発生する会話ができる対面交流にとって代わるものはないこと。
- ・時差があり、本事業内では気軽な交流が限定された。

Q. あなたは、コース・ディスカッションの内容に満足していますか。



日本参加青年

- ・プロジェクトを一つ立ち上げて、公的機関や企業とコラボレーションができれば、さらに興味深いだろう。
- ・良い話題ではあったのでもっと話したかったが、深く議論するには時間が短すぎたことが心残り。

- ・ディスカッションの時間が思ったより短く、外国参加青年と交流する機会も少なかったので、もっと交流時間を長くしてほしい。

外国参加青年

- ・とても詳しく、問題の本質をつく計画的にマネジメントされたコースだった。
- ・事前知識がある人には、少しばかり基本的な内容だった。事前課題としてもっと多くの関連書籍（論文）の提示がなされることで、全員でより深く議論ができたと思う。

Q. あなたは、コース・ディスカッションの共通テーマとしてのSDGsをどう思いますか。

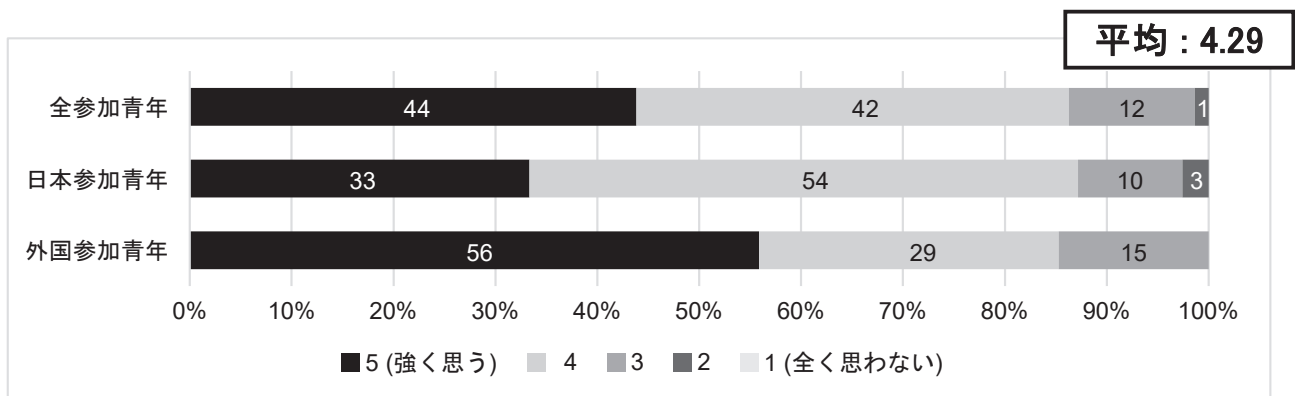
日本参加青年

- ・参加者の背景や各国の課題を理解することができ、SDGsのディスカッションは良いトピックだった。SDGsは私たちが世界中で考え取り組むべきことだ。国際的な視野で理解し、基礎的な知識を得ることができた。
- ・SDGsの各目標は関連し合っているのだと知った。より大きな変化をもたらすために、チームで解決策を探る重要性を知った。
- ・現代が抱える問題を考える良い機会になった。この事業を通じて、さらに社会の問題を勉強していきたい。

外国参加青年

- ・SDGsは、私たちがどのようにシステムを変えるべきかを明確に理解させてくれた。国によって目標やその達成方法は異なるであろう。しかし、SDGsの核心部分について全体で議論し、有意義な考えを得ることができた。
- ・どれほど世界の発展にとって重要であるかを考えると、とても適切なテーマだった。誰もが共感できる幅の広いテーマである。自分の身の回りでどのように実行されているか、または気付かれないでいるかという、それぞれの事例があった。SDGsは多様性に富んでおり、個人的に重要だと思うテーマを選択することができた。
- ・この事業は未来のリーダーを育成することを目的としており、参加者が全人類に関わる問題や解決すべき課題を学ぶというのは非常に良いねらいであり、好意的に考えている。

Q. ワークショップは、各国の文化交流の場としてふさわしいと思いますか。



日本参加青年

- ・他国の文化に興味を持ち、関心を持って関連ニュースを見るようになった。

外国参加青年

- ・コロナの有無に関わらず、不可能なことは何もなく学びを楽しむことができる。全ての人の意見を尊重すべきだということ、そして全ての国の文化に敬意を払うことを学んだ。

Q. 事業全体を通して改善点や提案などがあれば記入してください。

日本参加青年

- ・期間がとても短かった。参加青年とのコミュニケーションや課題を学ぶのに適している。プログラムが週末に開催されたことは、私にとっては都合がよかった。
- ・参加青年と仲良くなれたのは素晴らしいことだったが、事業が終わった途端に別れるのは寂しい。少し時間をおいてから参加者と再会する機会を作る方がいいと思う。
- ・準備だけでなく、コミュニケーションや相手を知るための交流の時間があれば、より良いプログラムになると思う。

外国参加青年

- ・より豊かな体験のためには、時間が短すぎたと思う。
- ・世界規模での事業では仕方がないのだろうが、残念ながらヨーロッパの国々においては、時差の関係で事業の開始時刻が早すぎると思う。
- ・例えばオンライン・ディスカッションの後に対話型コンテンツを設定したり、事業を修了するために全ての参加者が実際に会う機会を準備するなど、プログラムをよりインタラクティブにすることを提案したい。

2. 統率相談員所感

統率相談員：中沢聖史氏（東京都立大学国際センター特任助教）

内閣府が実施する「世界青年の船」事業の魅力は、日本を含む10を超える国の青年たちが、船の上、つまりどの国からも物理的に切り離された空間に一堂に会するという環境にあります。それは例えば、同じ船室で外国の青年と暮らすことにより、座学では理解していたはずの日本との文化の違いに改めてフラストレーションを感じる。あるいは、ディスカッション研修を通して、英語が得意なはずの自分が、英語がそれほど上手ではない他国の参加者に論破されて戸惑うこと。こうしたショックとの出会いに四六時中さらされ、それが特定の国ではなく、世界中から集まる200名以上の青年と船の上の共同生活を通して体験できることに大きな価値があります。そんな事業だからこそ、コロナ禍とはいえ、船での共同生活なしで、オンラインで事業実施をすると聞いた時は、成立するのかどうか疑問に思わざるを得ませんでした。

コロナ禍以前、税金を使って、限られた数の若者を客船に乗せて国際交流をすることに対する批判的な声を時々耳にしました。私は2014年から2019年にかけて、約6年間の間に1200人を超える参加者と船上生活を共にした経験がありますが、当時の日々を振り返り、改めて「船に乗って、海外に行けば、グローバル人材になれるのか」と問いに答えてみようと思います。

物理的な意味で、船に乗って、日本を離れ、海

外に移動すること自体には、当然のことながら人材育成の要素はありません。船の上の研修において重要な要素は、良質なカルチャーショックの積み重ねです。例えば、「5分前行動」を教え込まれてきた日本人が、船の上で10か国の外国の青年たちと時間の感覚をすり合わせることはそれだけで大きなチャレンジとなります。同様に、普段から「空気を読む」ことに慣れ親しんでいる日本人にとって、周囲の意見を気にせず各々がはっきり自己主張をする文化圏の青年を交えた会議を合意形成に導くことは至難の業です。このように、たくさんの文化や個性が交差する環境で、場面に応じてコミュニケーションスタイルを変えられる柔軟性を磨き、違いに対する共感能力を養い、実体験を通して自国と他国に対する理解を深められることが、船での国際交流の大きな価値であり、この原体験こそが、グローバル社会で活躍するための財産になります。

そして、ここで強調したいことは、上述の「良質なカルチャーショック」は、今回の「世界青年の船」（オンライン）でも多くの青年たちが体験していたということです。船の上かオンラインかという差こそあれ、私は今回参加した日本の青年たちが、外国の青年とのコミュニケーションに大いに悩み、戸惑い、苦労をしながら、失敗や成功を繰り返している姿を目の当たりにしました。時差の関係もあり、昼夜間わ

ずさまざまなオンラインツールを使って忙しく議論や交流をしている様子を見て、当初懐疑的だったオンラインの国際交流に対して、一定の成果が期待できるように感じるようになりました。

一方で、船の環境と大きく異なるのは、「オン」でつながり、「オフ」で途切れるというオンラインの特性です。船で24時間、共に生活をしていると、ふとした日常の中に無数の小さな役割や発見があります。船酔いしているルームメイトを看病したり、洗濯ものがたまった時に一緒にランドリーを使ったり、夜おなが空いた時にお菓子を分け合ったりというちょっとした役割を果たすことで、交流が生まれます。また、一緒に食事した外国の青年が特定の食材を食べていないことや、いつも部屋で特定の時間にお祈りを捧げるルームメイトの姿を見て、宗教や文化的風習について発見するというようなことも船では日常茶飯事です。オン/オフでつながるオンラインプログラム

では、こうした、ふとした日常に偶然生まれる役割や発見は失われてしまうということを改めて痛感しました。

さまざまな制約の中で実施された今回の「世界青年の船」（オンライン）でしたが、統括相談員として、参加する青年たちの悲喜こもごもに寄り添いながら、オンラインの国際交流の新たな可能性を感じる機会となりました。そして、この体験は同時に、オンラインでは再現できない、船の共同生活の価値を再認識する機会でもありました。参加した青年たちに対しては、「体験した学びの成果を言語化するように」と口を酸っぱくして伝えてきましたが、運営側もまた、事業の成果と課題をふりかえり、オンラインだからこそ実現できたこと、船でしか実現できないことを丁寧に検証する必要があります。そのふりかえりを経て、今後、内閣府がオンライン上で実施する国際交流がますます発展すること、再び船を使った国際交流が早期に再開することを期待しています。

2. 参加青年の構成

(1) 国別・年齢別参加青年数

年齢 性別 国名	「世界青年の船」事業（オンライン）						計	
	17～19歳		20～24歳		25～30歳			
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
オーストラリア	0	0	1	2	0	2	1	4
日本	0	4	1	24	2	8	3	36
ニュージーランド	0	1	1	0	0	0	1	1
オマーン	0	0	0	0	2	3	2	3
ポーランド	3	0	0	2	0	0	3	2
ロシア	0	1	1	2	0	1	1	4
南アフリカ	0	0	1	1	1	2	2	3
スリランカ	0	0	2	0	1	2	3	2
スウェーデン	1	1	0	1	1	1	2	3
計	4	7	7	32	7	19	18	58
（注）令和4年2月28日現在					合計		76	

(2) 国別・職業別参加青年数

職業 性別 国名		公務員		会社員		自営		教員		学生		その他		計	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
「世界青年の船」事業（オンライン）	オーストラリア	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	1	1	4
	日本	1	1	1	13	0	0	0	2	1	19	0	1	3	36
	ニュージーランド	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1
	オマーン	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3
	ポーランド	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	3	2
	ロシア	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	0	1	1	4
	南アフリカ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	3	2	3
	スリランカ	0	2	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	2
	スウェーデン	1	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	0	2	3
計		3	4	3	19	0	1	0	2	11	25	1	7	18	58
(注) 令和4年2月28日現在												合計		76	

3. 事後活動

参加青年は、内閣府青年国際交流事業の貴重な体験をいかし、積極的に事後活動を行うものとしています。事後活動は、一時的なものでなく、長期間にわたり継続的に行われていることが重要です。

1. 「日本青年国際交流機構」活動等

内閣府（旧総務庁）の実施している「青年海外派遣」「世界青年の船」「グローバルリーダー育成」「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」「東南アジア青年の船」「日本・中国青年親善交流」及び「日本・韓国青年親善交流」等の各事業に参加した青年は、日本青年国際交流機構を組織しています。

日本青年国際交流機構は、内閣府青年国際交流事業で得た成果を踏まえつつ、国際理解を深め、国際親善に寄与し、もって広く社会に貢献するとともに、会員相互の交流と研鑽を図ることを目的としています。

同機構は、現在約12,000名の会員を擁し、都道府県単位に行われる支部活動を始めとして、地域活動、本部活動と種々の活動を展開しています。

当事業の参加青年も、帰国後は同機構へ加入し、事後活動等を活発に行うことが期待されています。

また、都道府県の海外派遣事業の参加者による事後活動組織もあるので、事後活動において、これら

の関係団体との連絡、協力を進めることとしています。

2. 団体活動等

参加青年の中には、既に青少年団体又はグループに所属している者も多く、これらの団体に所属し、各団体の行う諸活動に積極的に参加し、海外研修の体験をこれらの活動に反映していくことも重要です。また、地域及び職域における活動についても同様です。

3. その他の活動

次のような活動は、所属団体又は日本青年国際交流機構の活動と重複することが多いので、事後活動として大切なものです。

- ① 参加青年が、派遣年度ごとに集まる機会を持ち、情報交換を行うこと。
- ② 内閣府及び関係団体が主催して行う全国大会及び地区別協議会へ参加すること。
- ③ 内閣府、地方公共団体及び関係団体等が行う外国青年招へい事業等により来日する外国青年の受入に協力すること。参加青年として訪れた国の青年が来日する場合もあり、旧交を温める良い機会となる。
- ④ 地域に在住する外国青年（留学生・研修生等）との交流を定期的に行うこと。

4. 既参加青年による事後活動組織設立への動きとその歴史

1. 「世界青年の船」事業既参加青年の国際的連携を目指して

昭和63年度（1988）に開始された「世界青年の船」事業は、令和元年度（2019）に実施された「世界青年の船」事業の参加青年を加えると、日本青年は計延べ3,677人、外国青年は67か国で延べ4,474人となっています。これら既参加青年たちは事業で得た貴重な体験をいかして、地域、職場、学校等において国際交流活動、青少年活動を活発に行うことが期待されているほか、日本と参加各国との友好親善の懸け橋としての役割も期待されています。

各国の既参加青年の事後活動は、当初は基盤となる組織や資金、そして活動のノウハウが乏しく、積

極的な活動展開が難しい状態でした。しかし「世界青年の船」事業が回数を重ねるとともに既参加青年の層も厚くなり、情報が蓄積されたことと、インターネットの普及も影響して、グローバル・ネットワークの確立と社会貢献活動の活発化に向けて、少しずつ前進を始めるようになりました。

寄港地、参加国共に固定されないという条件の下で、本格的な地球規模の活動を展開するための基盤の確立は難しい点もあるかと思われますが、国際連携組織の確立を目指して活動を推進していきたいと考えています。

2. 始まりはギリシャから

この構想の具体化の第一歩として挙げられるのは、平成6年2月（1994）に第6回「世界青年の船」事業の寄港国ギリシャのピレウスで行われた一つの集まりでした。これは、第4回事業に参加したハンガリーとスウェーデンの青年たちが日本の第4回事業の既参加青年と連絡を取り合い、ピレウスに入港中の「世界青年の船」に集合したものです。事前の準備不足や資金不足、連絡の不徹底等によって、集まった人数は少人数にとどまり、具体的な会議も設定できない状況だったものの、今後の展開を図る上での貴重な経験となりました。

3. 「世界青年の船」事業既参加青年代表者会議（インターナショナル・リユニオン）

このような経緯をたどり、正式なインターナショナル・リユニオンとして「世界青年の船」事業既参加青年代表者会議（東廻りコース）が平成7年（1995）3月2日～3日の二日間にわたり、メキシコのアカプルコに寄港中の第7回「世界青年の船」事業船上で開催されました。この会議には、寄港国メキシコの既参加青年を始めとして総計56人が参加し、親交を深めました。会議では、まず各国での事後活動組織の設立とそれを基盤とした各国内での活動の展開について議論が行われ、引き続いて日本と各国の事後活動組織の有機的な連携の方策と国際的なネットワークの構築について話し合われました。

最後に、第1回「世界青年の船」事業既参加青年代表者会議の結果ということで、今後の活動に関する提案文が承認され、その後の組織化の第一歩が印されました。以後、インターナショナル・リユニオンは平成18年度（2006）年まで運航中の「世界青年の船」事業のいずれかの寄港地で開催されました。

インターナショナル・リユニオンは当初は船上で行う二日間のプログラムでしたが、平成12年度（2000）のニュージーランドでの開催からは船上会議と訪問国活動を含む四泊五日のイベントとなりました。これまでの実績として、メキシコのアカプルコで3回（1995、1997、1999）、アラブ首長国連邦のドバイで1回（1996）、オマーンのマスカットで1回（1998）、南アフリカのケープタウンで1回（1999）、ニュージーランドのオークランドで1回（2000）、カナダのバンクーバーで1回（2002）、タンザニアのダルエスサラームで1回（2004）、オーストラリアのシドニーで1回（2005）、そしてモーリシャスのポートルイ

スで1回（2006）開催されました。平成13年（2001）10月についてはケニア、平成19年（2007）2月にはフィジーでの開催が予定されていましたが、それぞれ、「世界青年の船」事業の航路変更のため、中止となりました。

インターナショナル・リユニオンは平成19年（2007）より名称を「SWYAA国際大会（英語名称：SWYAA Global Assembly）」と変え、事後活動協議会との同時開催で訪問国活動と関連しない時期に実施するようになりました。

4. 「世界青年の船」事後活動組織（The Ship for World Youth Alumni Association: SWYAA）の設立

第1回「世界青年の船」事業既参加青年代表者会議（東廻りコース）に出席した第3回と第5回事業の既参加青年と第7回「世界青年の船」事業の参加青年によって「世界青年の船」事後活動組織についての原案がまとめられました。これを受け、第7回「世界青年の船」事業の船上においても熱心な討議が重ねられた結果、参加国ごとに3名のキーパーソンが決められ、今後のそれぞれの国における組織作りや各国との連携体制について定められました。その成果は、まず、エクアドルで事後活動組織が発足するという形となって現れ、その後も各国で次々と事後活動組織が設立されました。

5. 「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議（東廻りコース）の開催

第1回「世界青年の船」事業既参加青年代表者会議（東廻りコース）を受けて、各国の国内活動にとどまらず、本格的な既参加青年の国際的ネットワークを作ることを目指して、第1回「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議が平成8年（1996）1月16日～21日に東京で開催されました。

6. 「世界青年の船」事業既参加者（西廻りコース）の組織化

これまでは、東廻りコースの既参加青年の活動が先行していましたが、平成8年（1996）3月1日・2日の両日、アラブ首長国連邦のドバイ寄港中の第8回「世界青年の船」事業の船上において、既参加青年代表者会議（西廻りコース）が開催されるに至り、東廻りコースの活動状況が説明されました。また、平成9年（1997）1月16日から21日には、第2回

「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議（西廻りコース）が開催されました。

7. SWYAA国際連盟設立へ

東西における事後活動組織の組織化の流れを受け、「世界青年の船」事後活動組織憲章の前身となる「世界青年の船」事後活動組織合意書（東）が平成8年（1996）1月にまとめられ、「世界青年の船」事業東廻り13か国が合意書に署名しました。翌年、「世界青年の船」事後活動組織合意書（西）がまとめられ、「世界青年の船」事業西廻り14か国

が平成9年（1997）1月に合意書に署名しました。その後、平成17年（2005）にはすべての事後活動組織が共通の目標を持って活動に取り組むことを目的として、二つの合意書（東）と（西）は「世界青年の船」事後活動組織憲章という統一の憲章にまとめられました。「世界青年の船」事後活動組織憲章は平成25年（2013）にSWYAA国際連盟憲章に改定され、「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議に参加した28か国が署名し、新しい憲章は平成26年（2014）1月1日に施行されました。（SWYAA国際連盟憲章はホームページ参照）

5. SWYAA国際連盟について

1. SWYAA国際連盟とは

「世界青年の船」事業、グローバルリーダー育成事業、「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」（以後、「世界青年の船」及び後継事業）で培われた精神を継続させることを目的に、各国で既参加青年のための組織が設立されています。SWYAA 国 際 連 盟（Ship for World Youth Alumni Association International）は事業で培われた異文化理解、国際協力、国際平和の実現に向けてのリーダーシップ精神を推進し、支援しています。

2. 参加国

令和3年3月現在、正式加盟28か国、準加盟7か国が登録しましたが、非加盟の関係国を加えると67か国の国々が連携しながら、様々な社会貢献活動を展開しています。

3. 共通の使命と目標

1. 「世界青年の船」及び後継事業の既参加青年のネットワークを継続すること。
2. 加盟各国の友好関係を継続し、連携を強化すること。
3. 自国及び国際社会に貢献する活動に取り組むこと。
4. 自国及び加盟国において、社会に貢献するリーダーを育成すること。
5. 青少年分野を担当する自国政府との連携強化を図ること。
6. 加盟国の大使館との連携強化を図ること。特

に日本大使館との連携強化を図ること。

7. 日本人のコミュニティとの関係を深めること。

4. 共通の任務

1. 地域若しくは世界規模で社会貢献、ボランティアの取組、発展的な取組につながるような活動を企画すること。
2. 自国の会員のネットワークを強化すること。
3. 自国の会員及びSWYAA国際連盟加盟国の間で情報交換を強化すること。
4. 日本大使館とのコミュニケーションを図り定期的に活動報告をすること。
5. 「世界青年の船」及び後継事業の既参加青年と新しい参加青年とのコミュニケーションを図ること。
6. 今後、「世界青年の船」の後継事業に参加する青年を支援すること。
7. 既参加青年の正確な情報を把握し、保管すること。

5. 活動内容

① 「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議とは（通称：既参加青年会議 Ex-PY Conference）

原則年1回、内閣府が実施するSWYAA代表者のための会議。「世界青年の船」及び後継事業参加各国におけるSWYAAの形成・充実とそれを基盤とした各国内での事後活動の展開について情報交換を行うとともに、各国及び日本の既参加青年の有機的な連携による国際的ネットワークの構築に向けた

討議を行うことを目的としています。具体的には、SWYAAのネットワークを使って行う社会貢献活動や今後の事後活動の方向性、そして既参加青年がどのように事業に貢献できるかなどを話し合います。

これまでの会議の結果、ホームステイ・ネットワークの構築、事業に協力する既参加青年の指導官の推薦、参加青年のための事前準備マニュアルやナショナル・リーダーのためのハンドブックの作成、「世界青年の船」事業の紹介をするための広報用キット（プロモーション・キット）の作成、メーリングリスト使用のためのルール作り、そして事業参加予定者のためにSWYAAが実施する事前研修のガイドライン作成、といった成果が挙げられました。また、国内と世界に広がる会員のネットワークを活用して文化交流を促進させるとともに、更なるネットワークの強化を目的とした「グローバル・フォト・コンテスト」も平成16年度より4回にわたって開催されました。このほか、平成17年度にはSWYAA共通のロゴを決めるコンテストを開催、平成18年度には異文化理解ハンドブックをデータ化し、ホームページへの掲載を始めました。また、広報用に使用できる公式ビデオ（10分版）も完成しました。平成19年度には「世界青年の船」20周年記念事業の一環として、「世界青年の船」事業の各回の歴史や情報を集約するホームページの作成、SWYカレンダーの作成、チャリティ・ランチの実施及び環境への貢献活動として、「SWYの森（SWY Forest）」の植林に取り組むことなどが約束されました。平成20年度には国際支援活動として、ケニアで実施している国内避難民支援活動や、スリランカにおける就学支援に対して日本青年国際交流機構が協力することを約束しました。平成21年度から22年度にかけては、異文化理解教育のための教材を作ったり、「ホームステイ+1（プラスワン）」という名称でホームステイを受け入れながらボランティアなどの「+1（プラスワン）」の体験をさせたりする活動を広めることで合意しました。また、事業出身者でその後、功績を挙げた人の情報や、事業の意義についての参加青年の声を集約する動きも始まりました。

平成28年には加盟32か国の代表により共同声明が発表され、今後、以下の共通活動に取り組んでいく決意が示されました。

- (1) 「SWYAA 自然災害復興支援（SWYAA Natural Disaster Relief）」－自然災害に見舞われた地域に対して、災害直後の支援

から継続的な支援まで提供する。

- (2) 「将来のための教育(Educate for Tomorrow)」－恵まれない状況にいる子供たちに、教育の質の向上や教育の機会を与えるための活動を各国で実施する。
- (3) 「SWYの森（SWY Forest）」－SWYの森の継続的發展を支援する環境関連事業
- (4) 「献血週間（Blood Donation Week）」－献血への意識向上と、年1回のSWYAA献血週間の開催を促進する。
- (5) 「差別の無い機会（Opportunities Without Discrimination）」－「SWYの日」に、差別の撤廃と多様性受容促進に向けた国際的なソーシャルメディアキャンペーンに参加する。
- (6) 「ホームステイ・プラス・ワン（Homestay +1）」：SWYの既参加青年が、他のSWY参加国を訪れた際に、ホームステイと社会貢献の機会をセットで提供する。

② SWYAA国際大会（通称：グローバル・アセンブリー）

運航中の「世界青年の船」事業の寄港地で開催していた既参加青年代表者会議（インターナショナル・リユニオン）を、平成19年度からはSWYAA国際大会（英語名称：SWYAA Global Assembly）に名称を変え、活動が活発な国で年1回実施するようになりました。この大会では、社会的な貢献活動を地域若しくは世界規模で推進し、またそのような活動を達成するための方策を協議する「事後活動協議会」を同時開催し、各国の事後活動の状況を集約し、成果を総括します。

- 第1回SWYAA国際大会 ギリシャ
（平成19年9月5日～9日）
- 第2回SWYAA国際大会 日本
（平成20年8月21日～24日）
- 第3回SWYAA国際大会 オーストラリア
（平成21年9月2日～6日）
- 第4回SWYAA国際大会 エジプト
（平成22年10月9日～12日）
- 第5回SWYAA国際大会 メキシコ
（平成23年9月28日～10月2日）
- 第6回SWYAA国際大会 バーレーン
（平成24年10月4日～8日）
- 第7回SWYAA国際大会 ペルー

(平成25年8月29日～9月2日)

- 第8回SWYAA国際大会 トルコ
(平成26年8月30日～9月3日)
- 第9回SWYAA国際大会 フィジー
(平成27年8月12日～16日)
- 第10回SWYAA国際大会 インド
(平成28年9月20日～24日)
- 第11回SWYAA国際大会 UAE
(平成29年11月5日～8日)
- 第12回SWYAA国際大会 トンガ
(平成30年11月19日～23日)
- 第13回SWYAA国際大会 ロシア
(令和元年8月31日～9月5日)
- 第14回SWYAA国際大会 カナダ
(令和2年8月16日～23日)

*新型コロナウイルス感染症の影響で中止

6. コミュニケーション・ツール

① SWY News

「世界青年の船」事業及び後継事業の事後活動関連の機関紙（英）。SWYAAのホームページを中心に発信しています。各国の事後活動組織の活動内容や世界各地の既参加青年からの近況報告等の

内容の記事が盛り込まれています。これまでに27号を発行しました。

② インターネットを活用した情報交換

情報の電子化に伴い、既参加青年同士の情報交換を活発化するため、平成8年度（1996）にメーリングリストを立ち上げました。また、平成11年度（1999）の既参加青年会議での話し合いを基に、平成12年度（2000）にSWYAA共通のホームページを立ち上げ、各国の活動をホームページ上で紹介するようになりました。そのほかにも、既参加青年全体で情報交換をする目的で、各種メーリングリストを立ち上げています。

URL www.swy.international

③ SWYAA Directory（住所録）

「世界青年の船」及び後継事業既参加青年の住所録には、全ての既参加青年の氏名、住所、電話番号、ファックス、Eメール、興味のある分野等が掲載されています。この情報は既参加青年同士が連絡を取り合い、活動を推進していく際に役立てられています。

内閣府青年国際交流事業報告書2021
令和3年度
「世界青年の船」事業(オンライン)

発 行 内閣府
〒 100-8914
東京都千代田区永田町 1-6-1
TEL: 03-6257-1433
FAX: 03-3581-1609
URL: <https://www.cao.go.jp/koryu/>

編 集 一般財団法人青少年国際交流推進センター
〒 103-0013
東京都中央区日本橋人形町 2-35-14
東京海苔会館 6 階
TEL: 03-3249-0767
FAX: 03-3639-2436
URL: <http://www.centerye.org/>
編集協力 日本青年国際交流機構
URL: <http://www.iyeo.or.jp/>

内閣府青年国際交流事業報告書 2021
令和3年度「世界青年の船」(オンライン)